
ゴーレムマイスター

駈目師走

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーレムマイスター

【Nコード】

N6941Y

【作者名】

駁目師走

【あらすじ】

仲の良い兄弟が土機兵^{ゴーレム}に出会った事がきっかけで異世界へと飛ばされる。その世界は自分達がいた世界とよく似た、けれど異なる多元世界だった。魔科学^{まかがく}が発達したその世界には魔法練成なる技術が存在した。兄弟は元の世界に帰る事ができるのだろうか？そして何故異世界へと召喚^{よびよす}されたのだろうか？コミカルな風味を醸し出したつつもシリアスに描く多元世界転生の魔法ファンタジーです。

プロローグ（前書き）

この物語は日本の現在を舞台としておりますが、すべてフィクションであり、人物及び団体、地名などには一切関係はありません。

プロローグ

「兄さん、右腕の動きが変だ。魔力はしっかり供給されてる？」

「——んな事言ったって、うわっ。」

土と金属を混ぜた様な不思議な材質で作られた操縦席。

中央には水晶玉みたいな大きな紫色の玉。

尻が座面から飛び上がるほどの縦揺れの中、俺はその玉にしがみ付き、訳も分からず強く念じる様に力を込める。

紫の光がその光を増していき、その丁度真上に表示されるモニターに映される人型の映像に光が染み渡っていき、暗かった右腕部分も光を帯びた。

「——な、何とかいけそうだ、おらぁ！ 跳べえ！」

内臓が浮き上がるみたいな感覚に少々の吐き気を催す。

操縦席左右壁面と正面にあるモニターの奥壁面から見える外の風景が上下したかと思えば、広大な景色が眼下に広がる。

内臓が暴れまわったせいなのか、興奮しているせいなのかかわからないが、胸が煩い位に高鳴っている。

「兄さん、前！ 前、前！」

激しい衝撃と共に、更に激しく揺さぶられた内臓と脳。

目の前の広大な景色は一瞬にして星空に変わる。

奇妙な操縦席から引きずり出され、今だ焦点の定まらぬ俺の視界にぼんやりと映るのは俺を心配そうに見つめる我が可愛い弟。

「兄さん、大丈夫？ 怪我はない？」

「お、おう。死んだ婆ちゃんにちよいとばかし会って来ただけだ。」

「お婆ちゃんは死んでないでしょ。——それより、すごいね、この……」

弟が俺と共に巨木へと激突したソレを見つめる。

操縦席と同じく、土で出来ているのか、金属で出来ているのか、不明瞭な巨体。^{ふめいりよう}

かなりの高さから猛スピードで落下し、巨木に激突したにも拘らず、操縦者共々無傷なのは脅威的と言えた。

「――これが、俺の……土機兵。^{ゴレム}」

山道を走るバスの中。

二時間に一本という信じられない程に怠慢なバスを寸での所で乗り逃し、二時間待ってやって来たバスにやっと乗った俺と弟は祖母の家へと向かう道中だった。

事故で両親を亡くした俺達は唯一の身寄りである祖母に面倒を見てもらう事になっている。

祖母は偏屈な変わり者で人里離れた山の中に住んでいた。

祖母には一度として会った事はないが、高校二年の俺と、今年中学を卒業したばかりの弟では二人で生活するには思い切りが必要で、思い切りの足りない俺は祖母を頼る事に決めた。

俺と違い素直な弟は、俺の決断に異を唱える事なんて滅多にない。けれど、嫌な顔一つせず、俺に従う弟を見ると少し胸が痛んだ。

俺と正反対で優秀な弟は有名私立に特待生枠で入る予定だった。

最初は俺も「お前は折角いい高校に受かったんだから、こっちに残った方がいい。向こうでバイトすればお前一人の生活費くらいはなんとか捻出してやるよ。」なんて兄貴らしい事も言ってみたものだが、流石に非の打ち所のない弟は「兄さんと一緒なら高校はどこ

だって構わないよ。僕がいたい場所はいい高校なんて所じゃなくて、兄さんと一緒にいられる所だから。」なんて、もしも妹であればうっかり一線を越えてしまいそうな殊勝な発言をした。

そんな訳で俺は珍しく発揮した兄貴らしさをあっさりと引っ込めて弟を連れて行く事にした。

終電まで走破したオンボロバスを降りると、年に2、3人は遭難者が出ていそうな森の中。

携帯を開けば当然の様に圏外。

時折目の前を横切る虫は拳ほどではなかったにせよ、都会育ちの俺の目にはそのくらいの大きさに映った。

「一応、婆ちゃんの手紙には地図が載っていたんだが……」と言って、弟に差し出す。

その手紙を見て、弟の顔が青褪^{あおざ}めていくのが分かる。

かなり大雑把に描かれた地図だとは思ったが、物事をあまり深く考えない俺は着けばその地図で分かるものなのだろうと安易に考えていた。

それがそもその間違いで目の前に広がるのは土と木だけで方角すら分らない。

地図に描いてあるのは俺たちのいるバス亭と大きな木、そして『この辺』と書いて矢印の引いてある民家と思わしき絵。

目に付く木はすべて樹齢何年か、というくらいの巨木ばかりでどれが祖母の言いたい大きな木なのかさっぱり分らない。

「と、兎に角歩こう。」

「――兎に角歩いちゃったら、絶対遭難しちゃうよ！」
最もな言い分だ。

「何だか喉が渴いたからアイスが食べたいよな。」

俺達はそのままバス亭のベンチに座り込んでいた。

弟は俺の言葉を見殺したまま、何とか解読しようしているのか祖

母の茶目っ気溢れる地図を睨み付けている。

「俺達、このまま死んじゃうのかな？」

「兄さん、ちょっと黙っててよ。それにここから動かなければ、最悪引き返す事もできるでしょ？」

「まあな……しかし、ここで一泊はしなけりゃいかんけどな。」

「――へ？」

優秀な弟には珍しく素っ頓狂な声を上げる。

地図の解読に夢中になっていたせいかな、時刻表を見ていなかったのだろう。

俺はする事もなく、時刻表を眺めていたから知っている。

さっき俺達が降りたバスが本日最後の一本だった事を。

弟は一層必死になって地図に齧り付いた。

陽が落ち、辺りを黄昏が包み始める。

明らかに焦り始める弟を横目で見る俺。

こんな時、駄目な兄貴でよかったと思う。

窮地に直面した時、弟が不安そうにすると皮肉な事に俺の頭は段々と冷静になり、心は穏やかになっていく。

「さあて、頭を使うのはやめて、今度は身体を使うか。」

俺はそう言って弟の肩に手を引いた。

鞆からスナック菓子を取り出して、それを道々落とし、目印にして迷わない様に歩いた。

「兄さん、これ動物とかが食べちゃったら目印なくなっちゃうんじゃない？」

「大丈夫だ、こんな事もあるうかと、『すっぱいーヨ梅じそ味』を持ってきた。動物は『すっぱいーヨ』は食わねえだろ？」

「そうだね。それなら安心だ。」

弟がバスを降りて以来初めて笑顔を零した。

俺はそれに笑い返して、先に進む足を速めた。

本当に動物が『すっぱいーヨ梅じそ味』を食べない保証は勿論な

いが、それでも言わないと弟が不安に思う。

と言うよりも、そんな事は弟も重々《じゅうじゅう》承知だが俺がそんな馬鹿な冗談を言う事で弟は落ち着きを取り戻してくれる。

出来た弟の事だ、馬鹿な兄貴を護らなければと思うのだろう。

本当に駄目な兄は責任を持って必要以上に駄目な振りをしなければならぬ。

少なくとも俺と弟はそうやってバランスを取っている。

すっかり陽は落ちて暗くなった森。

唯一の救いは、晴れた空に浮かぶ満月が辛うじて視界を残してくれている事。

それとスナック菓子の『わさびポーク』を持ってきた事。

無くなった『すっぱイーヨ』の代わりに『わさびポーク』を落としながら、暗い森を歩く。

何処からともなく、梟の鳴き声が聞こえる。

ほんの何日か前に魔法使いの映画を見ていて、主人公の相棒である白い梟がこんな風に鳴いていたから間違いない。

2、3kmほど歩いただろうか、人里は見えず、辺りの木々が更に鬱蒼うっそうと生茂おいしげり、目にした事のない草花が目立つ様になってきた。

「クソ婆あ、あの絵心溢れる地図は方角だけは合ってたんだろうな。信じてるんだからな。」

疲れの所為もあり、苛立ってきた俺は悪態を付き始める。

道はどんどん細くなっていくし、心なしか山道をずっと登り続けている気がする。

「今、何か光らなかった？」

「――あん？ 俺には見えなかったぞ。」

「確かに光ったよ、向こうの方で……」

弟は木々の間を指差すが、暗がりでも数m先も満足に見えない状況では何かあるのかわからない。

ハッとして、辺りの手ごろな木の枝を手に取り構えた。

（もしかしたら、獣か何かの目が光ったのかもしれない。）

声には出さなかったがそう思った。

弟も感じているのだろうか、俺の裾を強く握り締めている。

「だ、大丈夫だ。兄ちゃん、喧嘩だけは強い知ってるだろう？」

（しまった、声が震えた。）と後悔したが、弟は気付かなかったのか、それとも気付いていない振りをしてくれたのか分からないが「頼りにしてる。」と俺の顔を見返してほほ笑んだ。

本当に出来た弟である。

妹ならば獣に喰われて、この世を去る前に！ と勢いに任せて押し倒している所だ。

けれど、獣ではなく、民家か何かがあるのかもしれない。

森の中では、その確率も低いが、万が一にもと考えると容易には去れない。

俺達は光の見た方へとゆっくりと近づいて行っただ。

そこには崖なのか、植物の集合体なのかよくわからない、草木に覆われた丘が聳え立っている。

目を凝らしてよく見ると、草木の隙間から金属の様な物が見えた。

光の正体はその金属が月明かりを反射したからと思われた。

俺は絡まっている蔓を引き剥がし、その金属を掘り起こそうとした。

かなり大きいソレは完全に草木に絡まれており、少し剥がしたくらいではその全容を現さない。

金属と土の様な素材で出来たそれに、何か文字が書かれている。

かなり古いものなのか、その文字は掠れていて、辛うじて一行読める程度だった。

「虚構きこうよりも真まことの現実を……」

「兄さん、これは一体？」

言い知れぬ不安感が湧きあがる気がした。

弟もそうなのだろう、少し声が震えている。

けれどそれと同時に湧きあがる探究心が、纏わりついた蔓を更に剥がさせた。

ある程度剥がすと、それが人型をしている物だと分かった。

無我夢中むがむちゅうで蔓を剥がし続け、その全容が明らかとなる。

「なんだ、こりゃ……。」

巨大な人型の建造物。

体長は三メートル程だろうか、少なくとも俺と弟の倍くらいの大
きさはある。

頑丈えんちやうそうな不思議な素材でできた身体。

まるでSF映画エスエフに出てくるロボットだ。

文字が書いてある部分の下には紫色の水晶玉の様な物が付いてい
る。

そこだけ明らかに違う素材で出来ていたので俺は何気なく、その
玉に手を触れた。

すると触れた部分が強烈な光を放ち始め、周囲の大気を吸い込む
様にそれを中心に風が吹き荒ぶすさぶ。

恐怖を感じ、手を放そうにも不思議とその手は離れない。

「ふ、ふざけんな、なんだよこれ。」

懸命に引っ張るが、玉に吸いつく様に俺の手は離れようとはしな
い。

弟が後ろから腰に手を回して一緒に引っ張るが、二人がかりでも
一向に離れる気配はない。

「何だか、やばそうだ。お前は早く離れろ！」

「兄さんを放って離れられるわけないだろ！」

さらに強い光が瞬き^{またた}、視界を奪われる。

そして身体が宙に浮く様な感覚の直後、何かが炸裂した様な音と共に俺は身体を吹き飛ばされるような感覚に襲われた。

薄っすらと目を空けるとそこは木々の生茂る森の中。

何かが爆発した気がして、死んだと思ったが生きているし、身体もどこも痛まない。

周囲もなんら変わらず、陰気な森の中のまま。

ただし、かなりの時間気を失っていたのか、すっかり朝日が昇っている。

傍に倒れていた弟も目を覚ます。

「――に、兄さん？ 僕達一体？」

「どうやら、何ともないみた――」

それに気づいた俺は驚きに声が詰まらせた。

気を失う前にあったはずの、巨大な人型の建造物が跡形もなく消えている。

目を擦って確認するが、やはりないものはない。

「どこに行っちゃったんだろう？」

「さあな。この風景からして、俺達がふっ飛ばされたわけでもなさそうだし、あの巨人が勝手に何処かへ行ったとしか思えないな。」

「あれって、動くの？」

「さあな。俺が知るわけないだろう。それより、婆ちゃんがきつと心配してる、陽のある内になんとか辿り着こうぜ。」

歩き出して、すぐに一つの疑問が浮かんだ。

ばら撒いてきたスナック菓子が一欠けらもない。

まさか本当に動物が食べたのか？ と特にそれ以上は気に留めなかったが帰り道がわからなくなったのは少し不安だ。

一時間程、当てもなく歩き続けた所で「兄さん、あれって。」と弟が何やら上の方を指差している。

その方向へと視線を向けるとそこには周囲の木から頭一つも二つも抜け出た巨大な木が聳え立っていた。

「クソ婆。本当にでけえじゃねえか。でもバス停からじゃさすがに見えねえよ……」

俺と弟は行く足を速めて、その巨大な木へと歩を進めた。

大ききの所為か近くに見えた木が意外に遠い。

しかし、人間って生き物はゴールが見えると頑張る事ができる現金な生物で、距離はあったが、不思議と辛さは感じない。

巨大な木の下に着いた頃には一軒の小屋がすでに視界に入っていた。

地図の絵とはかけ離れた雰囲気の小屋だったが、そこは敢て突っ込む事はせず、急ぎ駆け寄る。

平屋の古い家と言うか、小屋。

外には今時珍しく井戸があったが、苔塗れな所を見るとさすがに使っては無いのだろう。

けれど、こんな森の奥まで水道ってのは通っているものなのか？と疑問に思ったが気にしない事にする。

俺は古惚けたその小屋の扉を勢いよく開けて、声を張り上げた。

「遅くなってすいません！ 孫の日向奔と翔です。婆ちゃんいますか？」

玄関向こうに広がる木製の床で出来た渡り廊下に向かって大声を出すのが返事がない。

それから何度か「すいません。いらっしやいませんか？」と繰り返す。

やがて廊下の奥から「何度も言わなくなたって聞こえているよ！年寄り扱いするんじゃないよ、まったく。」と悪態を付く年配の女性の声が聞こえた。

「絶対聞こえてなかっただろうが……」

「何か文句でも言ったかい？」

小声で呟いた声を見事に聞き取り、反応が遅かった割に地獄耳だった祖母の怒声が飛んできて、俺と翔は思わず口を手で塞いだ。

「まったく、誰だ——」

祖母らしき年配の女性が目の前で驚きの表情を湛えて立ち止った。手に持っている蜜柑みかんが床に落ちて、ぐちゃりとなる。

初めて会う孫に感動しているのか、まるで死人でも見るかの様な驚き表情。

「お婆ちゃん、初めまして。俺が奔で、こっちが翔です。」

人見知りの激しい翔は声を発さず、軽く会釈した。

祖母はまだ驚いているかの様な表情で右手を前に差しだし、ゆっくりと俺達に近づいて来た。

差し出しされた手の指先が何やら小刻みに震えている。

（予想以上に耄碌もろろくしてんのかな？）と少し心配になる。

「そ、そんなに驚かなくても。確かに道に迷って一日遅れちゃったけど。」

「あんた達、死んだんじゃ……」

「は？ そんな大袈裟な、一日遅れたくらいで。」

「家族四人、事故で死んだって……」

「父と母は亡くなりましたが、俺達は生きていますよ。御厄介ごやっかいになると連絡を入れた筈はずなんですが？」

「あんた達、モンスターだね？ 私を騙そうたってそうはいかないよ！」

「いや、ちよつと、婆ちゃん——ぐっ！」

祖母が手に持っていた杖を俺に向かって翳かざした瞬間、柄の部分に付いていた見覚えのある様な紫の球が光を放ち、放たれた光が俺の身体を貫く様に奔はしったかと思うと同時に腹部に激痛を感じた。

「ちよつと、待ってくれよ。ってか一体今何したんだよ？」

「問答無用じゃ！ この変身モンスター！」

俺が両手を上げて降参のポーズを取った瞬間。

祖母は振り上げた杖をそのままに動きを止めた。

「お前、その腕の Magic reality device をどこで手に入れた？」

腕を見てみると見覚えのないブレスレットが嵌められている。

そのブレスレットにも祖母の杖と同じ様な紫の球が嵌められているのに気が付いた。

祖母はブレスレットをととても気にかけている様だが、俺にはいつ嵌められたのか、これが何なのかも皆目見当がつかない。

「は？ 何だって？」

「その腕につけているMRDの事を聞いているんじゃない。」

「マジックなんかだか、エムなんかだか知らねえけど、俺にはわけがわからねえよ！」

「まあモンスターがMRDを付けているわけがない、話だけでも聞いてやろう。」

そう言って、祖母は杖を下したが、警戒した様子はそのままに、俺と翔を中へと招いてくれた。

古惚けた外見通りの古惚けた廊下を後に付いて進むと、祖母の寝室らしき部屋へと招かれた。

寝室には大きなパソコンが置いてあって、無数の配線が壁や床に張り巡らされていた。

その光景はまるで『電子の森』だった。

椅子に座るよう促された俺達は、軋みの激しい木製の椅子に腰かけ、バス停に着いてからここに来るまでの事や、自分達の事を思いつく限り祖母に話して聞かせた。

しばらく訝しげな表情で考え込んでいた祖母は、自分の頭の中身を整理するかの様に淡々と語り始めた。

「父親と母親を事故で亡くして、貴様らは祖母である儂を頼ってここまで来た。しかし、ここに向かう道中、不思議な人型の建造物を見つけ、それに触れて気を失った——と。お前達の言っている事が本当なら、お前達はもう一つの世界から来たのかもしれない。」

「は？ それはどうい——」

パラレルワールド
「多元世界って事ですか？」

「は？ パラ……なんだよそれ？」

「考えられん事だが、どうもそうらしい。お前達がMRDの存在を知らない事も頷ける。」

「こっちの世界では、それは当り前の物なのでしょ——うか？ それは
お婆ちゃんが先程使った不思議な力と関係が？」

「おい、待て話を進めるな！ パラなんとかの件くだりからもう一回——」
「お前達の世界には魔法も存在せんのか？」

今の質問の意味はわかる。

俺も翔もさすがに言葉を失った。

魔法なんてものはRPGや御伽話ローレレイングがおしきばなしだけの存在で現実にあるわけがないと言うのが俺達がいた世界の常識。

しかし、どうもこっちでは違うらしかった。

「魔法があるってのかよ？」

「ああ、そこから説明が必要なのかい。少し長くなるぞ？」

祖母は億劫おっくうそうに眉間に皺しわを濃くして、俺と翔の顔を見渡してから確認する様に言った。

「結論から言えば、こちらの世界には魔法が存在する。しかし、それもほんの20年ほど前に生まれたものだ。事の初めはVirtuバーチャルal reality gameリアリティゲームだった。そっちの世界にもゲームはあったじゃろ？ 元は視覚や聴覚のみで楽しむ遊びだったそれに他の感覚機能への刺激を追加したのじゃ。痛覚や、触覚、味覚や嗅覚。そこまで来るとその世界は一種の仮想現実となる。ここまではわかるな？」

辛うじて、納得はできないが理解はできる説明に曖昧あいまいに首を縦に振ると、祖母は湯飲みの茶を一口飲み、続けた。

「大勢の人間がそれに没頭したよ。その内に今度はアダルトな目的に使用され始め、仮想現実で男は絶世の美女を抱き、女は絶世の美

男子に抱かれたわけだ。そこまで来るとVR《仮想現実》技術が進歩し、普及するのはあつという間じゃったさ。ひっひっひっ——」と下卑た笑いを浮かべる祖母。

アダルトな、の件^{くんだり}辺りから慌てて翔の耳を抑える俺。

「兄さん。今、お婆ちゃんなんて？」

「世の中には知らない方がいい事もあるんだ。さあ婆ちゃん続けてくれ。」

「人間は完全にVRにのめり込んだ。すべての欲望を満たしてくれるわけじゃから当たり前じゃな。しかし、人間とは愚かな生き物で遂にはそれだけでは飽き足らず、VRの外、つまり現実の世界に仮想を持ち出そうとしたんじゃ。それが魔法の始まりじゃ。儂の杖や、奔のブレスレットの様なMRDが開発された。MRDを介^{かい}せば、仮想を現実に変えられる様になったわけじゃ。」

「——そりゃあ一体どういう仕組みなんだよ？」と俺は腕のブレスレットを睨み付けた。

嵌めこまれた紫の玉が鈍く光った気がした。

「研究の結果、MRDを介して仮想を現実に変えられる量には個人差がある事が分かった。その力を魔力と呼んだ。魔力の多い者ほど大きな仮想を現実へと変える事ができるし、魔力の小さい者は小さな仮想しか現実にはできん。まあそんな魔法に関しての研究を魔科学と呼び、日夜研究され始めたのが最近の事じゃ。MRDを悪用してモンスターを生み出す輩が現れたしたのも最近の事じゃが……」

「モ、モンスターがいるのかよ？」

「召喚魔法と呼ばれる技術じゃな。かなりの魔力がないと出来ない事じゃが、MRDを持てれば可能じゃ。勿論、魔科学^{まじゅく}に関しては魔力の大小や召喚魔法以外にも色々あるが、それは追々《おいおい》でいいじゃろう。大体この世界の事はわかったか？」

正直いまだに理解はできても、納得はできない。

信じる事ができないと言った方が正しいか、祖母の話は俺達の世界では漫画や小説なんかで描かれる空想の話と何ら変わらない。

けれど祖母が不思議な力を使うのを目の当たりにした俺達は信じられなかった。

そんな世界に飛ばされたのなら、俺達が時空を飛び越えたのも強^{あなが}ちあり得ない話でもない。

「それじゃあ僕達はそのMRDの力でこの世界に呼ばれたって事になるのかな？」

一瞬、困惑した表情を浮かべた祖母だったが、自信なさげにゆっくりと答えた。

「正直、それは考えられん。時空転移や時間転移は理論上は可能だが、あまりにも膨大な魔力が必要で、そんな魔力を持った者は絶対に存在するわけがない。もしそんな化け物じみた魔力を持つ者がいたとしても、現存するMRDでは、そこまで強大な魔力に耐える事は絶対にできん。」

この世界の事は大体把握した。

俺達の世界とは別の選択をしたもう一つの世界。

並行世界、多元世界とかって呼ばれるものらしいけれど、正直そんな事はどうでもいい。

何故俺達がこの世界に来る事になったのか？　そしてどうすれば、元の世界に戻る事ができるか？　そっちが知りたい。

けれど、俺達にとって最重要のその問題に関しては、解決の糸口すらも掴めず、祖母には皆目見当^{かいもくけんどう}がつかない様子だった。

もちろん、俺達にも分かるはずもない。

そして、あの大きな人型の建造物は一体何だったのか？

大きな疑問を無数に残したまま、俺達兄弟はこっちの世界で暮らす事を余儀なくされた。

「翔、お前は何を読んでんだ？」

俺と翔は空を走るバスに乗せられていた。

内装や外観は俺達の世界のバスとなんら変わらないが、こっちのバスは空を飛ぶ。

俺と翔は祖母に「しばらくこの世界で生活するのなら――」と半ば強引にこの奇妙なバスに乗せられ学校へと向かっている。

向こうの世界でも通う筈だった学校『県立謳花学院』。

けれどその名称はこっちの世界では若干異なって、『魔立謳術学院』。

最早、聖なる学び舎とは思えないアニメチックな名前がついているのである。

「そもそも『魔立』ってなんだよ？」という葛藤と戦いながらもバスに揺られているというわけだった。

「……こっちの世界の僕は凄く優秀な魔錬師だったみたいだから、予習を、ね。」

魔錬師とは『仮想を現実に成す者』の総称らしい。

こちらの世界でも我が可愛い弟は優秀だったと祖母に聞かされた。さらにはこちらの世界でも俺は駄目な兄貴だったと出来れば知りたくはなかった情報も聞かされた。

直向きに教科書を読み続ける翔の顔を一瞥した後、外に視線を投げた。

空飛ぶバスはいつの間にか森林地帯を抜けて、街へと出ていた。

目の前に広がる街は、俺の知る街と大きな違いはなかった。

空飛ぶ車やバスやトラックが目の前を走り過ぎていく事。

そして、高層ビルの数が俺の知る街よりも200%程アップしている気がする事を除いては。

学校前のバス亭で降りると更に予想外な展開が俺達兄弟を待っていた。

教科書を手放そうとしない翔の手を引いてバスを降りると大勢の女学生が翔へと群がってきたのだ。

俺は鼻息の荒い女学生たちの勢いに気押され、あっさりと翔を差し出し、自分はそそくさとバス停のベンチへと非難した。

教科書に夢中になっていた翔は気が付いた時には女学生の群れに飲み込まれたのだろう。

揉みくちやにされながら、甲高い悲鳴を上げた。

俺が避難先のベンチで足元にある雑誌に気がついて拾い上げると、そこにはでかでかと翔の写真が載っていて隅には小さく俺の写真も載っていた。

『奇跡の生還！ 天才魔錬師、日向翔とその兄』

「その兄って……俺も奇跡の生還者って事になってんだから友人A的な扱いしてんじゃねーよ。」

その見だしの後には翔が如何に^{いか}凄い奴かって事が書き連ねられていた。

どうやらこちらの翔は俺達がいた世界の翔より圧倒的な有名人だったらしい。

『最年少、最上級魔錬師』『新術式開発』『^{てんげんじゅつし}天元十師任命』。

記事に書いてある翔の経歴にはよく分からない単語ばかりだが、凄い奴だったって事は不思議と伝わってくる。

（こっちの俺は俺よりも劣等感があったかもしれないな。）とこちらの俺の心中を想像し、思わず自嘲とも嘲笑ともつかない笑みを浮

かべた。

「に、兄さん、助け——て——」

バス停のベンチに腰を降ろし、呑気に拾った雑誌を読んでいた俺がやれやれと首を振りながら重い腰を上げ、女学生に囲まれた翔を救出に向かおうとした時だった。

眩い閃光が視界の左端で弾け、足元の石床が砕けて飛散した。

そして直後に地面を揺るがすほどの轟音が鳴り響く。

俺は砕けた石床の飛礫が脛に直撃し、痛みのあまり涙ぐんでその場にしゃがみ込んだ。

一体何が起こったのかと辺りを見渡すと、翔に群がった女生徒達が後退りしながら口ぐちに呟いた。

「……この魔法、下級師クラスの千早世良羅じゃない？」

「雷神、千早世良羅……。」

不安げに呟く女生徒達の表情が恐怖の色を深める。

そして視線が一点に集中し、俺はその視線の先を追った。

周囲の視線を一身に受け、淡々と歩を進めるのは同じ学生服をきた少女。

毛先にカールのかかった腰くらいはある長い金髪、大きくて少しつり上がった気の強そうな金色の瞳。

身長は翔くらいだろうか、俺よりは少し小柄な目も眩む様な美女が立っている。

「神々の畏れたる雷鳴よ——」

「やばくない？ また詠唱してるんじゃない？」

「我が猛る怒りをその神槍に宿し——」

小さな声で何かを呟きながら歩を進める世良羅と呼ばれた美女。恐れ慄く女学生達。

やがて、世良羅を薄らと光が包み周囲には電流の様なものが見え始め、所々で火花が散り始めた。

目の前を通り過ぎながら火花を散らす奇妙な世良羅のあまりの美

しさに迂闊にも瞳を奪われた。

「――兄さん！ その娘、序歌を詠んでる！ 本気だよ！ 早く止めて！」

見惚れて呆けていた意識が翔に引き戻され、言葉に従い世良羅の括れた細い腰を一心不乱に抱き止めた。

振り向いた、世良羅の顔に驚きが宿る。

ふっくらと柔らかそうな唇から紡ぎだされた言葉は「馬鹿？」。

その直後、目の前に走る閃光。

激しく身を撃つ激痛。

薄れゆく意識の中に仄かに鼻を擦る世良羅の香り。

激痛と世良羅の柔かさから出でる恍惚により俺の意識はやがて途絶えてしまった。

消毒液の香りと肌を擦れる覚えのある独特な感覚。

目を開けると、見覚えはない場所だったが何故か見覚えのある様な風景。

「――保健室か？」

誰に呟いたでもなく言葉を発した喉は驚くほどに掠れていた。

「確か俺、あの金髪巨乳に――」

目を擦りながら呟いた俺の右頬に痺れる様な痛みが走る。

静かな部屋に響き渡る乾いた炸裂音。

半開きだった目が一発で見開き、目に入っただのは先程の金髪美女、世良羅。

「えっと、あなた様は……どなた様？」

「やっぱり触っていたのか！」

釣り上がり気味の目尻がさらに釣り上がり、金色の瞳はきらきら

と潤うるおっている。

再び響く炸裂音。

右の頬をぶたれたら左の頬を差し出せと言うが、差し出す前に左頬はぶたれてしまった。

「何すんだ！ 痛いだろうが！」

「私の胸を触っただろう！ 触られた感触はあったんだ！ 私の事を巨乳などと辱はづかしめたのが何よりの証拠だ！ この変態め！」

「触ってねえよ！ あんたの胸がでかいのくらい見ればわかるだろうが！」

「やはり見てはいたのだな！ 見ていたら触りたくなっただな！ 確かに聞いたぞ！ 恥を知れ！」

怒声を捲まくし立て目に涙を溜める世良羅を見ると、何だか自分が悪者の様な気がしてきた。

俺はそんな無意味に湧き出た謎の自責の念を振り払う様に首を左右に振ってから仕切り直す事にした。

「まあとにかくあんたも俺に電撃くらわした上におまけの往復ビンタもかましたんだから、あいこでいいだろう。」

そんな言葉では勿論納得もちろんしないであろう世良羅は俺を睨みつけ肩を震わせていたが、力一杯鼻を啜すすって、目に溜まった涙を制服の袖で拭ぬぐった。

「電撃をくらわす、と言うがあれば君が悪いのだろう。序歌を詠唱している帯魔状態たいまじょうたいの私に抱き――掴つかみかかったのだからな。それに直前に私の電撃を見ているのだから、私が魔力放出系の魔錬師だと分かっていたはず。そんな私の帯魔状態の胸――いや、腰に掴みかかれれば当然あなるだろう。」

この世界では当然の用語なのだろうか、時折不自然に顔を赤らめながら小難こむずかしそうな用語をつらつらと人差し指を立てながら語る世良羅。

「まあな。」と分かったふりをして相槌あいづちをうち、「でも止めなきや

撃っていたんだろう？何であんな事をする？」と問うと世良羅の表情が強張るのが見えた。

折角目尻せつかくが下がり和らいだ表情になったのに、その問いに再び目尻が釣り上がる世良羅。

「目障りめざわりだったからよ。それにあそこにいたのは天才魔錬師の日向翔だろう？　ならお前が止めなくても私の魔法くらいあいつが防いでいたさ。」

顔を背けて、嘲笑を浮かべながら簡単に言っただけのける世良羅を見て、胸がざわつくのを感じた。

この世界はこんなにも簡単に人を傷つける事を冗談みたいにやってしまうのか？

それが怖かった。

ゲーム感覚なのかもしれない。

バーチャルリアリティ

VRから派生した様な今のこの世界ではこれが当たり前なのだろう。

本来この世界の人間ではない俺には、そんな事は到底納得とつていが出来なかった。

考えるよりも先に身体を動いていた。

言い終わってその場を去ろうとする世良羅の腕を掴む。

驚いた表情で世良羅は腕を掴む俺を見返した。

傷つけるつもりなんてないのに、不思議と掴んだ手に力が入る。

そこから敵意を感じたのか身構える世良羅。

「魔法だか何だか知らないが、二度とあんな使い方をするなよ。」

俺の言葉に拍子抜けした表情になった世良羅は俺の腕を煩わしい

といった態度で払った。

緊張が解けたのか竦すくめていた細い肩が少し下がる。

「君に指図される謂いれはない。」

大袈裟な程にツンとした態度を取ってその場を去る世良羅に俺は何も言えなかった。

確かに謂いれがない。

彼女達の常識と俺達の常識の隔^{へだ}たりを確かに感じた気がした。

「そんな事はないと思うよ。」

聞き覚えのある声。

世良羅が開けっ放しのままにしていた扉の外に翔がいた。

「今日一日、こちらの世界の人達を見ていたけど僕達とそう変わらないよ。彼女もきっと悪いと思ったから兄さんの傍に一日中付いていたんじゃないかな。」

「お前はエスパーか？ 兄の心を読むな。」

舌を出して、照れ笑いを浮かべる翔にベッドを下り、鼻の頭をこずいてやった。

そこで俺はやっと聞き捨てならない言葉に気が付き、不覚にも素つ頓^{とんきよう}狂な声を上げてしまった。

「——え？ 一日中？ 入学式は？」

ハンガーに掛けた制服の上着を羽織りながら外を見るとすでに茜色の空が広がっていた。

保健室の出入り口で状況がいまいち飲み込めず硬直する俺の肩に、そつと手を乗せた翔が首を左右に振って溜息^{ためいき}混じりに呟いた。

「全部、もう終わっちゃったよ。」

こうして、俺の記念すべき学園生活一日目は人知れず、いや、俺知れず終わりを告げた。

日が沈み、闇に包まれた山道の上空を来たバスの乗って帰る。

俺達の世界では二時間に一本のバスも、こっちの世界では大幅なショートカットのお陰か十五分に一本は来るから乗り逃す心配もない。

良い子の俺や翔はすでに眠っている時間まで走っているくらいに終電も遅い。

さらにはバスを降りれば、徒歩五分で祖母の家。

あの暗くて恐ろしい山道を震えながら歩いていたつい先日の方が嘘の様に快適だった。

夜も更けて、家に帰り着いた俺と翔は祖母と暖炉を囲んでいた。

この時代に、しかも俺達より更に科学が発達している世界で暖炉は時代錯誤もいいところだが、古臭い雰囲気は嫌いじゃない。

ほんのりと明かりの灯った部屋で鍋をつつくのは、まだ少し混乱する心を落ち着かせてくれる。

「婆ちゃん、こっちの翔があんなに有名人だなんて聞いてないぞ。バレちまうんじゃないか？」

「翔は自分の力や知識をひけらかす様な子じゃなかったから大丈夫だろう。――求められた時に結果さえ出せばね。」

「無責任だな。俺なんて今日死にかけたってのに。」

「大丈夫。あんたはちよつと死にかけるくらいに間が抜けているほうがリアリティがあるってもんさ。」

横を見ると姿勢を正して食事を食べながらも教科書を読む翔がいた。

懸命に勉強する弟とまだ教科書を開いた事すらない兄。

確かにこの構図がこっちの世界のリアルでもあったのだろう。

俺達が通う事になった謳術学院は俺達に馴染みのある学年制ではなく、階級制という制度があった。

下級師クラス、中級師クラス、上級師クラス、そして最上級師クラス。

年齢に関係なく、試験に受かったものが進級できる実力主義の学校。

俺と翔は下級師クラスに入学する事になった。

こっちの世界の俺達も謳術学院の下級師クラスに入学する予定があったらしく、案外とすんなりいった。

最上級師だったこっちの世界の翔は兄の俺と同じクラスを望んで下級師クラスへと編入したらしい。

まるで祖母の家に行く事を決めた時の俺達みたいに、こっちの世界の俺達も駄目な兄に弟が付き添うという構図は皮肉な程にそのままだった。

入学式の翌朝、昨日の事もあって少し早めに家を出た俺と翔は空飛ぶバスに乗って学園へと向かっていた。

翔の耳には祖母からもらったMRDが紫色の輝きを放っている。MRDとは紫色の玉を差しており、それ以外の装飾はまぢまぢの様だ。

（翔のMRDの方が洒落てるじゃねー）と腕のMRDに視線を落とした。

祖母もこのMRDのモデルは見た事がないと言う。

この異世界に飛ばされた事に何か関係があるのだろうか？
そんな事を考えている間に学院の前へとバスが到着した。

昨日の騒ぎで懲りたのか、それとも時間をずらした事が功を奏したのか翔の追っかけらしき女学生達が今日はいなくて、ホッとしたがその安心も束の間で更に会いたく人間が不機嫌面をぶら下げてこちらに向かってくる。

相変わらずの美しい容姿。

周りが霞むほどに目立つ、カールの掛かった金色の髪に勝気な金色の大きくてやや吊り上った瞳。

ワイシャツのボタンが弾けんばかりの大きな胸に、それに反比例するかのように括れた腰。

昨日の事がなければ、危うく一目惚れしてしまうところだ。

思い返して無視するべきかと迷ったが（同じ下級師クラスだから気まづくなりたくはねえな。）

そう考えた俺は引きつる頬の表情筋を総動員して吊り上げ、勤めて明るく手を上げて「世良羅さん！ おはよう！」と挨拶をしたが、世良羅はあっさりと俺の前を通り過ぎた、聞こえなかったわけじゃない。

すれ違いざまに「ふん。」と鼻を鳴らしていたから間違いない。

「あんた、そんなんじゃないやあ友達できねえぞ。」

つつい悪態あくたいをついてしまうのが俺の悪い癖だ。

俺の前を過ぎ、数歩先で足を止めた世良羅が小刻みに肩を上下している。

（あ、やべえ。）と思った時にはすでに遅く、不機嫌面に磨きのかかった世良羅が振り返り、つかつかとにじり寄って来た。

「世良羅と呼び捨てにされるのも気に入らないけれど、あんた呼ばわりはもつと気に入らない！ 初対面なんだから千早さんと呼びなさい！」

「いや、おい、初対面って——」

「うるさい！ うるさい！ うるさい！ 君に出会った昨日を消したいわ！ 今日也会わない様に早く家を出たのになんでいるの？ 今日も消してしまいたくなってしまったわ！」

「そりゃあないだろ——」

「とにかく、いいから、黙って聞きなさい。今後一切、私に話しかけない近寄らないを貫きなさい！」

肩を大きく上下させ、息を切らすほどに言葉を吐き出した世良羅が俺の返事を待つことなく勢いよく前に向き直り、再び歩き出した。心配そうに俺の裾を引っ張る翔に急かされるようにして、俺達も後を追って学園へと向かった。

昨日バタバタしていてよく見れなかったせいか、すごく新鮮に見える学園。

学園の門は童話に出てくる巨人でも潜れそうなくらいに大きく、白い支柱は毎日磨かれているのか顔が映りそうなくらいに綺麗で朝日を反射して輝いている程だ。

一步門の中に入ると緑の多いキャンパスが出迎えてくれた。

装飾の施された豪華な花壇によく手入れされている植木が並んでいる道を通って学院内へ。

玄関は吹き抜けになっていて、朝日が溢れんばかりに差し込んでくる。

長い廊下は突き当りが見えないほどに続いている。

外から見ても敷地が大きい事は分かっていたが、中に入ってみるまでまさかこれほどとは思っていなかった。

「驚いたでしょう？ 僕も昨日は凄く驚いたよ。」
確かに驚いた。

俺達のいた世界の学校とは大きく異なるその光景はここが異世界なのだと再認識させてくれるには十分すぎた。

俺は翔に案内され、教室へと向かう。

向こうの世界と同じように『理科室』や『家庭科室』なるものがあったが、中には『方陣室』や『召喚室』となるべくお近づきになりたくない部屋もある。

『下級師クラスB組』と書かれた部屋の前で翔が「ここだよ。」と俺を中に入るように促した。^{うなが}

どうやら下級クラスの中でも組分けがなされている様でA、B、C組の内、俺と翔はB組になったみたいだ。

大きく息を吸い込んで扉に手を開けた。

昨日は一度も教室に顔を出せず、クラスメイトとも面識はない。気分はすでに転校生だ。

元々、異世界からの転校生みたいなものなのだが、翔に先を越されたのが孤独感をさらに増大させる。

目を強く瞑り、木製の白い扉に手を掛けて勢いよく開く。

好奇の目で見られるのか、疎外的視線を向けられるのか、はたま
た……

「って誰もいねえじゃねえか！」

綺麗に整列された机と椅子には誰もおらず、電気もついていない教室に俺の渾身の突っ込みだけが響き渡った。

「ま、まだ早いからね。」

苦笑いを浮かべてそう言う翔を見返し、どうしようもなく恥ずかしくなった俺だったが兄の威厳を保つべく平静を装って席へと着く。

「兄さん……」

「なんだ、翔？ お前も早く席に着け。」

「そこ僕の席なんだけど……」

動揺のあまり席に書かれた苗字だけを見て、うっかり翔の席に着いてしまった俺は視線を翔には向けずにそっと尻を椅子から浮かせてすぐ後ろの自分の席へそそくさと移動した。

それからHRホームルームが始まるまで翔と目を合わせる事ができなかったのは言うまでもない。

クラスメイト達がぼらぼらと登校してきて、無人だった教室の席が次第に埋まり始め、心なしか電球の照度が上がり、気温も上がっていく様な気がした。

冷たく恐ろしいイメージのある無人の教室が、人が一杯に入った途端に活気が溢れ雰囲気が大きく変わるのだから不思議だ。

人ひと懐なつっこい者はすでに友達が出来ているのだろうか、挨拶を交わす者や机を挟せんで会話している者がいる。

俺は生来せいらい、人見知りはないが決して人懐なつっこいタイプではないので黙して机に座しながらも周囲のクラスメイトをチラ見する。

始業のチャイムが鳴り、席に着かずに楽しげに会話していた連中もそのチャイムに慌あわてて自分の席に着席する。

チャイムから教師が扉を開くまで、数分の静寂があり、その間何故だか無駄に緊張してしまった俺はお尻の辺りにじんわりと汗をかいた。

扉を開けて入って来た女教師と思おもひしき人物は俺とそう歳が変わらないくらいに若かった。

眉辺りで綺麗に切り揃えられた黒の前髪。

肩の下で綺麗に切り揃えられた黒の後ろ髪。

スーツも黒。

中に着ているシャツも黒なら、瞳の色も黒、マニキュアまで黒で、恐らく下着も黒なのだろう。

グラマラスな体系を黒で無理矢理引き締めた女教師は油断からだろうか、はたまた過信なのだろうか、黒いシャツの胸元は第三ボタンまでおっぴろげで飛び出さんばかりの巨乳と言う括りにはすでに収まり切らないであろう爆乳をひけらかしている。

本当にこれは教師なのだろうか、と疑いたくなるほどに目つきの悪い黒づくめの女教師が教壇に立ち、ファイルを叩きつけた。

「ゴミ虫共。出欠を取るからハキハキ返事をしさせ。」

（いや、教師じゃねーだろ。こいつ。）

「えー、クソ安藤。」

「は、はい。」

「あー、ゴミ浦田。」

「ゴ……、はい。」

「クソ」だの「ゴミ」だのを生徒の名前に付け加えつつ女教師の点呼は続く。

「クソビッチ千早……、千早世良羅は今日もいねえのか？」

世良羅が同じクラスだった事に俺は初めて気が付いた。

辺りを見渡すと空席が一つ。

あそこが世良羅の席なのだろう。

朝、校門の前で会ったから登校はして来ているはずなのだが、なんて考えたが報告する義務はないのでそのままスルーする事にした。何せ俺は冷徹な男ではないにしろ、お節介せっかいを焼くタイプでもない。そして更に点呼は続き――

「えっと、昨日女にのされた哀れで惨めなゴミでクズな日向兄。」
こめかみの辺りが脈打ったのを感じたが、世渡り上手を駆使しつつ足りない能力を補う人生を送ってきた俺は心を落ち着かせて笑み

を湛^{たた}えて返事をした。

出欠の点呼を取り終わり、女教師は右手で頭を掻き、左手をシャツの下から中に突っ込み腹を掻きながら話し始めた。

乱暴に突っ込まれた左手とシャツの隙間から覗く、ヘソのチラリズムは男子生徒の思春期ゆえの妄想をかき立てるには十分過ぎるものだったので、心の中で（ご馳走様です。）と呟いた。

性格は明らかに悪い女教師だが、補ってあまりあるほどに容姿が いいのは認める。

先程の罵倒^{ばとう}はすでに頭の片隅にすらなく、（楽しい学園生活になりそうだ。）などと頭に花を咲かせている。

「あたしが雑魚^{みたらし}下級師クラスB組の担任をする事になった、最上級師クラスの御手洗^{みたらし}静琉だ。とりあえずはあたしが卒業するまではこの担任をするからな。口を噤^{つぐ}んで、ただただ付き従え、そして敬^{うやま}え！」

前の席に座っていた翔が振り返り俺に説明をしてくれた。

どうやら、俺達の世界で言う教師とは異なり上級生が下級生の教師を務めるシステムらしい。

だから当然教師になる者に人間性を求めているから地蔵の様に口になるのだろう。

「——おい、日向兄。あたしが喋^{つぐ}っているのだから地蔵の様に口を噤^{つぐ}んで話を聞け！」

静琉は俺を一喝して教壇から降り、淡々と語り始めた。

踏み出す度に上下する静琉の胸部に男子の視線は集中したが、この世界に慣れない俺には静琉が語る話の方が興味を引いた。

「貴様らは最下級のクズだから基本から説明してやるが、そもそも魔法と言うのは名ばかりで正しくは我々魔鍊師は想像を具現化する事により、特殊な力を発揮する。」

ここまでは祖母の説明で理解もしているし、仕組みはわかっているがその事実に対しては納得している。

「この想像を具現化する行為を【鍊成】と呼ぶが、鍊成するには手

順がある。まずは【思念化】。色や形などをできるだけ具体的に想像する事だ。そして次に【流動化】。思念化により想像した対象及び部位に魔力を流し込む事だ。例えば炎を口から吐き出したいと思念化した力を錬成したいのなら、口腔内に魔力を流し込まなければならぬ。その行為を流動化と呼ぶ。そして、最後に【集束化】。先程の例えで言えば、口腔内に流し込んだ魔力を集束して、思念化情報を具現化する作業だ。思念化、流動化、集束化の三点が上手に行われる事で魔法の錬成は完了する。」

正直、そんなに簡単なのかと啞然あぜんとなった。

もっと代償的な物が必要だったり、煩わしい手順を踏まなければ魔法は使えない物だと思っていたからだ。

口を開けて呆けている俺を一瞥した静琉は眉間に皺を寄せて続けた。

「――最下級のゴミである貴様達でも分かっているとは思いますが、思念化、流動化、集束化は簡単な事ではない。思念化する為には【フォーマット】をMRDにインストールしなければならないし、流動化で上手く魔力を供給しなければならず、それにはMRDの操作を熟知していなければならない。さらには集束化で供給した魔力を凝縮し具現化しなければならないが、それにはコツや才能が不可欠だ。」

教鞭を伸ばし、俺を指す様にして振り回す静琉。

明らかに俺に向けて言っているのだろうと推し量るのはその態度からも容易である。

静琉は教鞭を自分の肩に担ぐ様に置き、面倒臭そうに欠伸あくびまじりでさらに続けた。

「まあ色々と制約はあるにしろ、簡単な魔法錬成は義務教育のガキにだって使える。この学園は貴様ら雑魚を人の役に立てるレベルの魔法錬成が行える様にする為の施設だ。――さあ貴様らの足りない脳味噌で理解できたなら体育館に移動するぞ。」

暴言を一通り吐き終わりすっきりしたのか、静琉はやつとの事で笑顔を浮かべた。

しかしその笑顔に仄かな恐怖抱く俺達生徒は言われるままに静琉の後に従って体育館へと移動し始めた。

長い廊下を渡り、学園内の最深部にある体育館へ。

教室のある中心部から最深部の体育館までは歩いて15分近くもかかったからこの学園の不気味なまでの巨大さを身体で認識する事が出来た。

体育館は木目状の床に綺麗にワックスが掛けられていて、様々な色のテープで線が引いてある。

ここまでは俺達の世界とそう変わらないのだが、やはりこの学園の体育館だけあり、広さは馬鹿げていた。

バスケットボールのコートなら10個くらいは作れそうな、グラウンド並の広さを誇る体育館など見た事がない。

俺達の組が一番早かったようで、同じ様に担任に率いられ、不安そうな面持ちで他の組の連中も体育館へと入って来た。

組ごとに整列させられ、姿勢を正して待つと、眼鏡をかけた前髪の無駄に長い男が体育館奥のステージの上に立った。

その時、後方にある体育館の扉が大きな音を立てて開いた。

生徒達全員が突然の大きな音に驚き、一点に視線が集中する。

俺も同じように音のする方へ視線を向けると不貞腐れた顔をした世良羅が立っていた。

制服の上に羽織った白いカーディガンの裾すそを伸ばして掴む様にながら歩を進める世良羅は注目されて恥ずかしいのだろうか、肩を竦めており耳は赤くなっている。

「み、み、見てんじゃないわよ!」

恥ずかしさに堪たまりかねたのか顔まで赤らめて怒声を発する世良羅。周囲の空気が帯電した様にパチパチで火花を散らせた。

「遅れてきておいて見るんじゃないだろうが、このクソビッチ。さ

っさと列に並べ。」

ただでさえ目立つ容姿をしているのに、あの性格では翔をぶち抜いて学年一の有名人になる日もそう遠くはないだろうと俺は嘲笑の笑みを浮かべた。

さすがの世良羅も静琉に叱責されて、大人しく列へと並んだ。

顔は相変わらずの不機嫌面だったが、元々あいう顔なのだろうと思えばいい加減気にならない。

「ごほごほっ……私、学年主任の駿河志智郎すまがしちろうと申します。昨日からの入学式等色々お疲れさまでした。ごほっぐほっ……。」

世良羅に集まった視線を遮るおさへかのように、咳き込みながらも丁寧な言葉で喋る志智郎は少なくとも静琉や世良羅よりも随分とまともに見えた。

ただし顔色はすこぶる悪い。

「失礼します。」とがらがら声を発し、後ろを向いてさらに激しく大きく咳き込む姿は、あんまりまともではなさそうだと一瞬で俺の考えを改めさせる。

「失礼しました。私、あまり身体が丈夫ではないもので……。話を続けます。貴方達はこれから最上級師を目指してこの学び舎で励むわけですが……。ごほごほっ。」

「――とその前に一度死んで頂きましょうか。」

長い前髪の間隙から除く眼鏡の奥で妖しく輝く眼光。

志智郎の言葉の意味を飲み込む前に視界が一瞬で漆黒の闇に包まれた直後、足元が崩れ去るような感覚に襲われた。

内臓が持ち上げられる様なジェットコースターに乗ると起きる落下時特有の身体的異常を感じたが、地に足はついていし、着地したような衝撃も感じない。

恐る恐る目を開けると、つい先程までの体育館はすでになく、ごつごつとした岩肌の洞窟と思われる風景が眼前に広がっていた。

暗がりといえは暗がりだが、一寸先が見えないほどの闇ではないし、暗闇に少しづつ目がなれてきた事もあり周囲の状況が把握できるくらいにはなった。

肩がぶつかる位の距離にいた見知らぬ生徒も、目の前に立っていたはずの翔もない。

（また飛ばされちゃったのか？ 翔はどこに？）

「空間形成とはやってくれるわ。」

聞き覚えのある女の声。

「――にしても、一体なんのつもりかしら。」

できれば今後関わりあいにはなりたくなかったが、さすがにこの状況では無視する事はできない。

「千早さん。これは一体？」

出っ張った岩に腰を降ろした世良羅は何が気に入らないのか、言葉を発した俺を容赦なく睨み付けた。

けれど魔法の事もこの世界の事も殆ど理解していない俺が今頼れるのは、このツンツン美少女だけだ。

勇気を振り絞り、無下にされる事は覚悟の上で再び声を振り絞る。

「千早さん。これは――」

「空間形成術よ。君はそんな事も知らないの？」

予想外だ。

もう2、3度無視される事を覚悟していた俺にはこの上なく嬉しい誤算である。

「俺、あんまり魔法に詳しくなくて……」

訝^{いぶ}しげに、言葉を発することもなく俺を見返す世良羅の熱烈な視線に耐えかねて眼球が泳ぐ。

「——まあいいわ。最上級師が数人がかりならこの規模の空間形成術が練成出来ても不思議ではないしね。」

「いや、だから、空間形成術って？」

「空間形成術って言うのは、こんな風に何も無いところに空間を作り出す術式の事。具現化系練成の最上位術式よ。」

「そんな事までできるんだな。すげえもんだ。」

「君、そんなに呑気に構えてて良いの？ 閉じ込める事が目的とは考えにくいし、必ず何か仕掛けてくるわよ。」

「仕掛けるって何を？ 急にそんな事を言われても……。」

腰かけながら不満気に頬杖^{ほおづえ}をつく世良羅は余裕がある様に思えたが、首を動かさずに周囲を見渡し何かを警戒している事に分かり、そうではないのだと気付いた。

世良羅の隣にある岩に腰掛た俺は暗がりの中での沈黙を恐れ、会話を続けようとする。

「でも、学生とはいえ教師なんだから危険な事はしないだろ？」

「君、魔立の学校を舐めてない？ 君は天才の弟君とは違うんでしょ？ それなのになんでそんなに余裕ぶっているわけ？」

「そんなつもりはねえよ。余裕なんて、あったことないさ……弟が優秀すぎるとな。」

「別に君が死のうが半身不随になっても私は構わないけど、警戒した方がいいのは間違いないわ。魔立の学校では授業中に怪我人が出るなんてざらだし、死人だって——」

言いかけて世良羅は顔を顰^{しか}めて言葉を絶った。

俺は聞き逃さなかった。

今、確かに死人が出る事もあると言おうとした。

魔法が存在する位にファンタジーな世界なのだから多少危険な事もあるのかもしれないとは思っていたが、学校の授業で死人が出る

なんてのは俺の常識の外だ。

更に言えば、死人なんてサスペンスドラマでしか見た事のない現代っ子の俺からすれば、その告白は膝が笑うほどに驚き、恐れられる事だ。

言葉を発すれば、声が震えてしまいそうで、沈黙に耐えることを選んだ俺は口に手を当て、世良羅の様に頬杖をつく格好動揺を悟られまいと固まった。

しばしの沈黙の後、世良羅が急に俺に覆い被さるようになり、当たっていた手ごと俺の口を塞いだ。

密着し、その場に倒れる様に岩肌に背中を打ち付けるが、世良羅の柔かな感触とシャンプーの臭いだろうか、柑橘系の甘い香りに全身は研ぎ澄まされ痛みなど感じない。

股の間に柔かな太ももを射し込まれ、胸部に確かに感じる柔かな膨らみ。

（何だ？ 何故押し倒された？ 嫌われてはいないにしても、好かれている雰囲気などまるでなかった。いやむしろ高確率で嫌われているだろう。なのに何故？ はっ！ まさかあれか？ 異世界に飛ばされた男は次から次に現れる大勢の女の子達に思いを寄せられハーレム状態になると言うあれなのか？ 翔にはあり得ても自分にはあり得ないと思っていたが……、それでは遠慮なく。）

「――静かにしてよ。」

生まれて初めての状態にうっかりトリップしてしまった俺は思いの外、息遣いが荒くなってしまう様で、小声で叱責する世良羅のひんやりと冷たい掌に口を塞がれた。

その冷たさに冷静を取り戻せた俺は、自分と世良羅以外の者の気配を感じた。

獣臭い臭気が鼻を突き、荒い息遣いが耳に障る。

それは見るまでもなく、直感的に人とは異なる者を連想させた。

覆いかぶさる様な格好のまま俺の口を塞ぐ世良羅が耳元で囁き、

吐息に首筋がくすぐられる。

「――やるしかないわね。君は援護しなさい。」

そう呟いた世良羅は急に俺の上から飛び上がり、首だけを少し浮かせていた俺はその反動で頭を地面に打ち付けた。

ぶつけた頭を擦りながら視線を上げると、見た事もない化け物が俺達の前に仁王立ちしている。

童話に出てくる狼男に似た姿。

しかし目の前のリアルなそれは今まで見たどんな物語の挿絵なんかよりも醜悪で恐ろしい姿をしていた。

「神々の畏れたる雷鳴よ、我が猛る怒りをその神槍に宿し――」

聞き覚えのある文言。

ほの暗い洞窟が蝟燭ろうそくの様に微弱な光を纏い始めた世良羅に照らせ明るくなる。

帯電している様な世良羅の身体からは稲妻が迸ほとばしり始め、それを見ていた化け物は低く唸り声を上げて身構えた。

よく見れば、世良羅の指にはMRDが装着されており、指に光る紫紺の玉からは浮き出るようにしてキーボードに似た形状の物が具現化しており、世良羅はそのキーを懸命に叩いている。

「――【雷槍】よ我が敵を穿て！」

その言葉を発すると共に激しい閃光が世良羅の指先から迸り、化け物の胸部を貫いた。

人差し指を突き出した世良羅の指先からは一筋の煙が立ち昇っている。

化け物は短い悲鳴を上げてその場に突っ伏した。

「――やったのか？」

「次弾装填。術式名、雷槍再起動。思念化情報再構築――」

俺の問いに応える事もせず、再びMRDからキーボードを出し、忙せわしなくキーを叩き始める。

キーボードは半分透き通っていて、そこに存在しているのかもあやふやで3D映像のようだ。

M R Dと同じく紫色の光をぼんやりと放っており、その光が世良羅の鼻筋の通った美しい顔を照らす。

「何をぼさつとしているの？ 次が来るわ！ 早く援護しなさいよ！」

世良羅の言葉通り、次は三匹も先程と同じ化け物が現れた。

けれど俺には魔法は使えない。

使い方がさっぱりわからない。

「ど、どうすりゃあいんだよ？」

もはや魔法について無知な事を隠しておける状況ではなかった。

後先考える前にこの状況を乗り切らなければ、「後」そのものが存在しなくなってしまう。

「君、本気で言っているの？ M R Dを持っているのに何の魔法練成もできないって事？」

「その通りだよ！ さっさと教えてくれ！」

化け物達はすぐに飛び掛ってくる様子はなく、俺達を囲む様にして移動する。

化け物の口から零れる涎よだれが危機感を掻き立てる。

「信じられない！ 信じられないわよ、君！ とにかくM R Dを起動させなさい！」

「それすらわかんねえんだよ！」

「わけがわからないわ！ 記憶喪失なの？ それとも果てしない馬鹿なの？」

「んな事、今はどうでもいいだろう！ 早く起動のさせ方を——」

「触れて起動コードを唱えればいいだけよ！ ほら、早くしなさい！ まさかそれすらわからないとは言わないでしょうね？」

「わかんねえよ！ そんな——」

そこまで言葉を発したところで、頭に言葉が浮かび上がってきた。空虚の脳裏に浮かんだ言葉。

化け物達が必殺のポジションを取り終えたのか、身を低くして臨戦体勢を取る。

「起動コードが本当にわからな——」

「——虚構よりも真の現実を！」

頭に浮かんだ言葉をそのまま口すると腕のMRDが眩い光を放ち、キーボードが浮かび上がった。

「知っているんじゃない！　こんな時にふざけないで！　早く憑代よりしろをこちらに向けて！」

俺が腕を差し出す前に世良羅が乱暴に憑代と呼んだキーボード状のそれを引き寄せいじくり始める。

憑代の操作に集中し、自然と身体が近くなり何度か感じた柔らかさを肘の辺りに感じたが、そんな事を考えている時ではないので感触だけを記憶の奥に大事にしまい込んでおこうと世良羅に感付かない様に小さく左右に首を振った。

「——思念化をオートに設定。ATモードで憑代を再起動。」
オートマチック

わけの分からない事を呟きながら憑代をいじくり回していた世良羅が離れると俺の憑代は光を失って消滅してしまった。

「おい！　消えちまったぞ！　どうすんだ！」

「うるさいわね！　今再起動中だから、立ち上がったら——」

さすがに待ち切れなかったのか、化け物が毛むくじゃらの腕を振り上げて一斉に襲い掛かってきた。

「序歌を省略！　雷槍よ、我が敵を穿て！」

世良羅の指先から再び閃光が迸り、至近距離の化け物を撃ち抜いた。

けれど先程の化け物よりも頑丈なのか、苦しそうに唸り声を上げ膝をついたものの、すぐさまゆらりと立ち上がる。

世良羅は口角を少し下げて小さな舌打ちをした。

「おい！　あまり効いてないみたいだぞ！」

「しょうがないじゃない！ 序歌を破棄したんだから！」

そう言われてみれば、先程の閃光よりもかなり光が弱かった気がする。

恐らく序歌とは呪文の事で、それを詠まないと魔法は本来の力を発揮する事ができないのだろう。

そうこうしている間にキューンとディスクの回るような音と共にMRDが光を放ち、キーボードだけだった憑代と呼ばれるそれにモニターが追加された形になって再び現れた。

「何でもいいから、術式を立ち上げて！ 思念化はオート化してあるからイメージする必要はないわ！ ATモードだから流動化と集中化もオートでやってくれる！ 序歌は憑代のモニターに表示されるものをそのまま詠み上げて！」

指先から、か細い電流を発し、化け物に抵抗しながら早口で捲くし立てられ、言われるがままにモニターに表示されている【術式フォルダ】なるものを開いて、一番上のファイルを選択した。

「えーっと……」

「大地を切り裂き、海を割るその隻腕を振り上げ……【憤怒の右腕】よ！ わ、我が敵を打ち砕け！」

脳が泡立ち、血液が沸騰し逆流する様な感覚。

身体が熱を持ったように熱くなり、その熱が右腕へと集中していく。

嗚咽おえつが鳴りそうな程に気分が悪い。

気分の悪さが増していく事に同調するように右腕が光り輝き、徐々に巨大化していく。

「お、おい！ これ本当に大丈夫なのか？ すごく気分が悪いぞ。」

「大丈夫、体調が優れないのはATモードの憑代によって君の魔力が無理矢理に操作されている反動だから心配ないわ！」

「——そういう、事は、先に説明し、ぐう！」

右腕に締め付けられるような激痛が奔る。

いつそ右腕を切り落としてしまいたいほどの痛みに唸りながら、朝の教室で静琉が教鞭を振りながら語っていた言葉を思い出した。（魔法は決して簡単じゃないってわけね。楽しようとするところいう風になるわけだ。）

思念化、流動化、集中化。

そのすべてをオートでやろうとすると強引に脳内にイメージを作られる反動で脳が激しく揺れ、泡立つ様な感覚に襲われる。

流動化で全身の血液が逆流するような感覚に陥るのは血液が移動しているのではなく、魔力を意思とは関係なく操作されている証拠だろう。

そして、腕がこんなにも痛いのは恐らく集中化の影響なのだろう。魔力を帯び右腕の光はその照度を強め、帯魔化された状態の腕は徐々にそのサイズは大きくなり、形状までもを変えていき、痛みが徐々に増していく。

まるで腕が引き伸ばされるような感覚とそれに伴う激痛に瞳が湿る。

光が弾ける様に進み、あまりの眩さに目が眩んだ。

「……なに、それ？」

世良羅の動揺を含んだ声が耳に届き、視力を取り戻し始めた眼で痛みの治まった腕に視線を落とす。

俺の右腕は先程までとは大きく異なる姿へと変貌していた。

地面に付くほどに巨大化し人間の皮膚ではなく、金属の様な土の様な不思議な素材で構築された腕。

驚きというよりも恐怖に近い感情に頭が真っ白になる。

唯一脳裏に浮かぶのは、この世界に飛ばされる直前に翔と見た巨大な人型の建造物。

あの建造物を構築していた素材にそっくりな自分の腕がさらに気味が悪く、恐怖心を駆り立てる。

「なんだっつーんだよ……。」

驚きに立ち竦んでいると世良羅の悲鳴が聞こえ、腕に落としていた視線を慌てて前へと向けた。

二匹の化け物に世良羅は両腕を拘束される様な形になっていて、少し離れた場所にいた残りの一匹の化け物がそこに歩み寄る。

普段は勝気な表情を崩さない世良羅の顔が恐怖に歪んでいる。

離れていた場所にいる化け物が世良羅に危害を加えようと近づいているのは一目瞭然の光景だ。

涙を溜めた視線をゆっくりと俺の方に向ける世良羅が助けを求めているのは鈍感な俺でも瞬間的に悟る事ができた。

正義感とは違うし、恋愛感情なんてものでも当然ないが、絶対に助けなければならぬと思った。

「化け物が！ 千早さんを離しやがれ！」

この右腕が魔法である事は間違いなく、どんな効力があるのか、どの様に使えばいいのかはわからなかったが、俺はただ我武者羅に^{がむしゃら}変形した腕を化け物へと振りかざそうとした。

が腕が動かない。

肘から下が巨大化し、変形した腕は恐ろしく重く、肩が外れそうになる。

まるで米俵を腕にぶら下げているような感覚。

無理矢理動かそうと駆け出した俺は右腕に引っ張られる様にして尻餅をつく。

折角^{せつかく}苦しい想いをして魔法を発動してもこれでは余計な足枷^{あしかせ}が増えただけで、生身の方がまだマシだった。

化け物の魔手が世良羅に迫る。

「なんだよ、これ？ 動け！ 動きやがれ！」

その場に根を張ったようになった腕は引き摺って移動することも叶わない。

自分の腕を引き千切る勢いで力を込める。

変形した部分と生身の部分の繋ぎ目の肘のやや上部の皮膚が引っ張られて激痛に冷たい汗が背筋を伝う。

それでも右腕はぴくりとも動かない。

重さのせいか、洞窟の岩肌にめり込む腕はどう頑張っても動かせる気配はない。

化け物は大きな口を開けて、世良羅へと飛びかかった。

「いやあああつあつ！」

甲高い悲鳴が洞窟に反響する様に響き渡り、俺は顔を背けた。

突如、上空に舞い上がる様な感覚。

エレベーターで上昇している時は、丁度こんな風に不快感が内臓を揺らし、耳を詰まらせる。

体育館から洞窟へ移動した時とよく似た感触に恐る恐る^{まじった}瞼を開いた。

俯^{うつむ}いていた視線の先に映るのは見覚えのあるテープで点線状のラインが引かれた艶やか木目状の床。

先程の暗がりと比べ、遥かに眩しくなった視界に瞳の奥がじんと痛む。

周りを見渡すと洞窟に飛ばされる以前は綺麗に整列し姿勢を正していた生徒達が体育館中に拡がる様にばらけ、一様に息を荒げて臨戦態勢の構えをとっていたり、恐怖に腰を抜かす様に尻餅についていたりしている。

斯^かく言う俺も体育館に戻れた事を認識しているにも関わらず、いまだ膝は恐怖に震え、背中には冷たい汗をびっしょりと掻いていて、肌にくっつくシャツが気持ちが悪い。

（戻って来たのか？ もう安全なのか？）

急激にやってきた安心感に俺はその場へとへたり込み、大きく息を吐いた。

「――兄さん！ 無事でよかった！」

翔が俺に飛びついて来た。

随分心配していたのか目には涙を浮かべている。

俺は自分の事に必死で翔の心配をする余裕すらなかったのに、同じ状況にいたと思われる翔はしっかりと駄目な兄を心配してくれるから敵わない。

びしょ濡れになった俺のシャツに掴まって鼻を^{すす}吸る翔の頭を^{ふが}不甲斐無さは一旦横に置いておいて努めて兄らしく、優しい手つきで撫^な

でてやった。

元の空間に戻れた今、世良羅は果たして無事なのだろうか？と途端^{とたん}に心配になり辺りを見渡すと、壁に寄り掛かる世良羅が億劫^{おっくう}そうな表情を浮かべて、先程まで化け物に掴まれていた二の腕の辺りを抑えていた。

鋭い爪をした化け物に掴まれて怪我をしたのではないかと案じたが、それは余計な心配だったらしく俺の視線に気付いたのか、勘のいい世良羅は殺気の籠った視線を俺に返してきた。

俺が不自然に引き攣^つる笑みを向けると世良羅も引き攣^つった笑みを返してくれた。

（よかった。あまり怒ってはいないみたいだ。）と思ったのも束の間、癖^{くせ}なのだろうか、先程のごたごたで少し汚れてしまった白いカーディガンの裾を掴んで肩を疎^{すく}めながらつかつかと俺の方へと気味の悪い笑顔を湛えたまま歩みを進めてきた。

目の前で立ち止った世良羅を見て、（必死で助けようとした気持ちだけは伝わっていたのかな？）と気が緩んだ瞬間。

頬に激しい痛みを感じ、正面を向いていた筈の首が大きく右に振れた。

体育館中に響き渡る頬を打った平手の音に視線が集中する。

頬も痛いが集まる視線も痛い。

女子に殴られている所を皆に見られるのは恥ずかしい事この上なく、最上の恥辱^{ちじよく}である。

ぼうぜんじしつ

茫然自失のまま、首さえ正面に戻せないでいた俺は翔の「に、兄さん大丈夫？」の一言に正気を取り戻す。

文句の一つも言ってやろうと勇んで顔を正面に向け、口を開いたが言葉は喉の辺りで止まった。

いつもはやや右寄りで綺麗に分けていた前髪が顔にかぶさる様に乱れ、後ろ髪もぼさぼさになっている。

頬は煤けていて、笑んでいた筈の顔は悲しげなものに変わってい

て金色の大きな瞳にはじんわりと涙が込み上げてきている。

いつもは勝気な世良羅もやはり怖かったのだと痛感した。

無事だったとはいえ、化け物の大口がそこまで迫って来たのだから無理はない。

俺が頬を打たれたのだって、当然の報いだ。

世良羅は確かに俺に助けを求める視線を投げたのに、結局俺は何もする事は出来なかった。

「貴方！ いきなり兄さんに何を——」

事情を知らない翔が庇^{かば}おうと前に出たのを俺は左手で裾で引っ張り、押し留めた。

「いいんだ。俺が全面的に悪かったんだから。」

その言葉がさらに怒りを煽^{あお}ってしまった様で世良羅は両手で俺の胸を思いっきり突き飛ばし、鼻を鳴らして離れていった。

後ろ姿の世良羅の右手が目を擦る様に伸びたのが見えた。

涙を拭ったのか、煤^{すす}を拭ったのかはわからなかったがそれは俺の胸を締め付けるには十分な素振りで、力いっぱい突かれて胸が苦しくなり咳き込みそうになったが、被害者面をする事になってしまいうような気がして息を止めて必死に堪^{こら}えた。

「——兄さん、また彼女と何かあったの？」

心配そうに俺の顔を覗き込む翔の髪をくしゃっと握って「何でもねえよ。」と誤魔^{ごまか}化した。

「——にしてもさっきのは一体なんだったんだ？」

心配し続ける弟の気を逸^そらそうとに問うと、口元^{くちもと}に手を当てて考える素振りをした後、真剣な面持ちで翔は言った。

「意図は想像がつくけど、この世界はやっぱり僕等の世界と感覚がずれているのかもしれない——ってそれどうしたの？」

派手に変形した俺の右腕に今頃きずいた翔は目を丸くして驚いた。どうやったら元に戻るのかわからない俺は変形してしまった右腕を擦りながら経緯を世良羅との内容は出来る限り端折^{はしよ}って説明した。

「兄さん、この素材ってもしかしてあの森で見た建造物の……。」「似ているよな。それよりもどうやってこれを元に戻すのかが知りたいがな。ずっとこのままじゃ茶碗も持てないから餓死しちまうよ。」

俺のいつもの自虐^{じぎやく}に翔は笑みを取り戻してくれた。

「外部から手動にて、憑代を起動。術式強制終了——これでよし」と。

翔が変形した腕の手首辺りをいじり、何かの作業が終わった合図をするようにポンと叩くと俺の右腕は見るうちに縮小していき元通りになった。

変形時に破れてしまったワイシャツの裾はそのままだが、右腕だけ人間を捨てるよりは遥かにマシだと自分に言い聞かせて諦めをつける。

「——にしてもお前は何でMRDの使い方を知っているんだよ?」「この世界で、特にこの学園で生活していくにはMRDは必需品みたいだしね。僕には兄さんが無関心すぎるような気がするけどな……。」「

悪気なく口にした翔の一言に胸がちくりと痛んだ。

無関心なわけではなかったが、敢^あえて知ろうとはしなかった。

仕方なく一時的にこの世界にいるだけだ。

こっちに來てからずっとそんな事を考えていたから、向こうの世界ではあり得ない魔法の事をなるべく知らずに過ごせばそれが最善だと思っていた。

俺はいつも間違いを犯してからそれが間違いだった事に気がつく。そして取り返しのつかない後悔を繰り返してばかりいる。

もう少し魔法の使い方を翔の様に勉強していれば、世良羅を助ける事ができたかもしれない。

例えば救う事はできなくても援護するくらいはできたはずだ。

今回は事なきを得たが、一歩間違えば俺の不甲斐^{ふがいな}無さのせいで命

を落としていたかもしれない。

最上級師達がそこまでするわけはなかったとしても、周囲の生徒達を見ると結構な傷を負っている者もいる事から、大怪我していた可能性は大いにあり得る。

「――ちくしょうが。」

翔には聞こえないよう、自責の言葉を呟いた。

「オラァ！ ゴミ虫共がいつまで騒いでんだ！ さっさと並べ！

または死ぬ！」

朝のHRまでは癪に障っていた暴言も化け物の巢から帰って来た今では不思議と心地よいくらいだ。

周囲の者と生還の喜びを分かち合っていた生徒達も静琉の怒声に列を作り始める。

制服が破れてボロボロの者や、多少なりとも怪我をしている者も大勢いたが最上級師の教師達は容赦なく並ぶように急ぎ立てる。

やがて、元の通りに整列が完了するとステージの上で待ちかねていたかの様に志智郎が口を開いた。

「ごほごほ。皆さんお疲れ様です。ごほっ……楽しいひと時を過ごせましたでしょうか？」

何を言っているのかと苛立ちが募る。

こんな時は穏やかで丁寧に語られるよりも静琉のように罵詈雑言を浴びせられた方が幾分マシだ。

「――楽しくはなかったみたいですね。けれどそれでいいのです。魔法錬成なんてものは怖くて恐ろしいものなのですよ。げほっ。」

言葉の途中でフレームの厚い黒縁眼鏡を人差し指で上げた後にレンズから覗いた志智郎の眼光は洞窟に飛ばされる前に「死んでください。」と言葉を発した時の瞳と同じものだった。

生唾を飲み込む音が体育館に響き渡った気がした。

緊張に思わず生唾を飲み込んでしまったのは俺だけではないはずだ。

そのくらいに志智郎の眼光は猟奇的な印象を抱かせた。

「この学園に入学する際、大体の人はこれから待つ楽しい学園生活を想像し、半ば浮ついた気持ちでこの体育館に立ちます。けれど魔法錬成技術の習得及び上達の道は極めて厳しく、浮ついた気持ちでは死に繋がる恐れすらあります。なので先程の洞窟探検はそんな諸君らの気を引き締める為の通過儀礼的なものだと思って頂ければ幸いです。ごほっごほ。後は自分達の無力さを存分に思い知って頂けたかと思えます。素人の中では中途半端に錬成に長けた方が入学してくる事の多いこの学園では、そんな勘違いを正す事が安全面でも諸君らの成長の妨げを除く意味でも大変重要な意味を持つのです。」

志智郎の言いたい事は理解できる。

魔法の危険さと錬成技術の未熟さを示したかったと言う事なのだろう。

確かに昨日の世良羅の一件からもこの世界の人間は危険な魔法を容易に振り回す節は見て取れたし、身を持って教えるというやり方自体はあながち間違いいではないのかもしれない。

けれど、さっきのは完全にやり過ぎだ。

生徒達のほとんどは軽傷ではあるにしろ怪我を負っている。

世良羅に至ってはもう少し体育館に戻るのが遅れていれば大怪我をしていたかもしれない。

しかし、そんな事を力のない俺が声を大にして志智郎に訴えた所で説得力などありはしない。

志智郎ははっきりと言う事はしなかったが、「危険が恐ろしければ去れ」と暗に言っているようにも聞こえた。

（こんな所にいる意味はあるのか？ こんな事をしている間に元の世界に戻る方法を探した方がいいじゃないのか？）

無数の逃げ口上が脳裏に浮かんでは消えたが本当はわかっていた。

この世界の人間は異世界に移動する魔法は使えないと祖母は言ったが、現に俺や翔はこの異世界へと飛ばされてきた。

そんな漂流者である俺達ならば、魔法練成技術を磨けばもしかしたら元の世界へと転移する事も可能かもしれないと祖母は思ったのだろう。

今はこの世界に來た時にいつの間に俺の腕に装着されていた腕のMRDだけが手がかりなのだから魔法練成を身に着ける事が唯一の道である俺には選択の余地なんて最初からなかった。

「この世界の人間じゃないから――」と何かをする前にやらなくていい言い訳を探しているから俺は道を間違えてしまう。

（目の前で人が死んだり、傷ついたりするのを何も出来ずに見てるのはもう御免だ。）

強く、強く手首のMRDを握り締めた。

自分の中にある弱さを握りつぶす様に。

洞窟の中にどれくらいいたのかわからないが、茜色の光が暗幕の
間から射し込んできている事から己の体感よりも随分と長い時間が
経っていた事が分かる。

志智郎の話が終わるとその場で解散させられ、負傷者を先にして
生徒達が退場していく。

俺は後ろめたさに鉛の様に重くなった足を踏み出せずにいた。

「兄さん、もう行こう。さっきから何だか変だよ？」

すでに人も疎らになった体育館にこれ以上いる意味はない事など
わかってはいるが、後悔ばかりが足に纏わりつく。

「けほっ。日向奔君だね？　ちよっといいいかな？」

いつまでも、うじうじとしている俺に志智郎が声をかけてきた。

俺なんかに一体何の用があるのだろうか、志智郎は微笑を浮かべ
て俺を誘う。

体育館を出て、案内されるままに志智郎の後に着いて行く。

少し距離を開けて着いてくる静琉が穏やかな表情を浮かべる志智
郎とは異なり、眉間に皺を寄せて怪訝な表情をしているのが妙に気
になった。

職員室と札の掛かった扉を入り、その奥の学年主任室へ。

ここでは学年主任が最高責任者なのか職員室に並べてあった鉄製
の机とパイプ椅子とは対称的に豪華な木製の大きな机とリクライニ
ングチェア、中央には向かい合った来客用と思わしき大きなソファ
ーがある。

俺がいた世界では校長室は大体こんな作りをしているものだが、
こちらの世界はやはり少し違っている。

手持ち無沙汰に辺りをきよろきよろと見回しながら突っ立っている
俺達に志智郎が座るようにと手だけで促す。

ソファーへと腰かけるとあまりの柔らかさに後ろに大きく踏ん返り
返り背もたれに寄りかかってしまった。

直るのも照れくさいのでそのままできてやろうかとも思ったが、
汚物でも見るかの様に俺を見下す静琉の視線に慌てて寛いだ姿勢を
正す。

「さて……、ごほっ。」

志智郎が前置きの言葉を発し、緊張に身体がびくりと反応してし
まった。

職員室や校長室って所は悪いことをしていなかったとしても緊張
せずにはいられない、と言っても後ろめたい事がなければ連れてこ
られる事もまずないものだが、異世界からの漂流者と言う後ろめた
くはないにしろ、こちらの世界の人間には隠しておきたい事が確か
にあるのだから余計に緊張してしまう。

「先程の洞窟での映像はこちらでモニターしていてね。君には面白
い物を見せてもらったよ。」

志智郎に聞こえてしまうのではないかと心配になるほど心臓が大
きく脈打ち、瞳孔は収縮していく気がした。

魔法が使えないことを言っているのだろうか？

もしかしたらこちらの世界の人間ではないとばれてしまったのか？
ばれていたらどうなってしまうのか？

不安ばかりが募る。

「――あれは機械練成かい？」

「は？」

突然「あれ」と言われても何の事か分からず、つい素っ頓狂な声
が上がる。

「洞窟で見せた腕を練成させた術式さ。あんな術式は見た事がない。
あれはいつ、どこでインストールした物だい？」

「いや、それは……」

言葉に詰まる俺を真横に立っている静琉が訝しげに見下ろす。

「当然、知っているとは思いますが機械練成が不可能と言われているにも関わらず、君は機械練成らしき術式を使用した。私がしている質問は魔法に携わる者として自然な疑問だと思うのだが？——げふん。」

「……………」

「当然」の部分に不自然に語勢を強めた志智郎に上手い言い訳の言葉が見つからない。

どこまで悟っているのだろうか、表情からは何も読み取る事ができない。

言い訳をしても下手を打ちそうな上に、上手く誤魔化そうとしても口元には笑みを湛えてはいるものの、レンズ越しの瞳がまるで笑っていない志智郎には心の奥まで見透かされている気がしてならない。

「答えられない理由でもあるのかな？」

「そういうわけでは——」

「あれは機械練成ではありませんよ！」

俺が困惑し曖昧な受け答えをしていると翔が怒りの色を含んだ言葉放った。

「私の目には機械練成に映ったのだが——」

「志智郎さんともあろう人が何を馬鹿な事を。人間では精密な機械を思念化する事はできず、術式の開発者自身が思念化できない物は術式化もできないのは最早、常識です。兄の魔法は僕が開発中の人体強化練成術式に過ぎません。」

「ごほっごほっ……。君はそう言うが、形状や素材が大きく変化していたのはどう考えても妙だし、何より思念化をオートで行ったとはいえ、発動した術式を術者が制御できておらず、その場から動く事すらできないとは一体どう言う事だね？ 練成を初めて行ったわ

けでもあるまいし。さらに言えばお兄さんが身に着けているMRDのモデルを私は見た事もない。おかしい点があまりにも目に付くとは思わないかい？」

これまで穏やかだった志智郎の口調が心なしかきつくなる。

口元は相変わらず笑んでいるが、すでにそんな柔らかな印象は微塵もない。

「開発中と説明しました。術者が制御できないのはその為です。MRDも祖母が新しく開発した新モデルで、これもまだデータ採取中の未完成機です。」

「日向笹江女史が……。」

納得した訳ではないのだろうが、祖母の名を出した途端に志智郎はあからさまに言葉に詰まった。

何とか凌げそうな気配が漂ったのは束の間で、それまで大人しく聞いていた静琉が反論する。

「待てよ、翔。じゃあ何か？ お前の糞馬鹿兄貴は不完全なMRD

をぶら下げて、不完全な術式を窮地の場面で発動したとそう言うわけか？」

「そうです。」

「MRDの再起動をクソビッチの千早にやらせて、ATモードにしたのも不完全なMRDの所為だともいいやがる気かよ？」

「そうなりますね。」

静琉は嫌悪感を露わにして口元を歪め「ふざけやがって。」と捨て台詞を残すと部屋を出ていった。

表情一つ変えず口から出まかせを次から次に繰り出す翔に感心する。

俺は黙っていた方が良さそうだと思い、ソファに寄り掛かり他人事のように振る舞った。

穏やかな表情のまま睨みをきかせ合う翔と志智郎。

やがて志智郎が大きな咳払いを一つして根負けしたのか、翔から目を逸らした。

恐らくその間三人の中で一番緊張していたのは小心者の俺だったのだろう、志智郎に悟られない様に静かに長く息を吐いた。

「まあいいでしょう。そう言う事ならばこれ以上追及もしません。ごほほ……。けどね翔君。僕は君の事もなんだか別人みたいに感じているんだ。はっきり言えば不審に思っている。それだけは忘れないでくれ。げほっ……げーほっ。負傷者も多いので明日以降はしばらく休校にするから、しっかり身体を休めてくれたまえ。」

一礼して主任室を出ようと扉に手を掛けると背後に視線を感じた。志智郎が時折みせるあの猟奇的な眼差しを俺達の背中に向けているのではないかと思ったが振り返れば彼の中の疑念は確信に変わってしまう。そう思ったから振り返らずにおいた。

帰りの廊下では誰一人、人とすれ違う事はなかった。

静まり返った廊下に俺と翔の足音だけがぺたぺたと響く。

別の世界云々《せかいうんぬん》は勘付いていないとしても、俺達が本当の俺達ではないのではないか、という疑念は持っているの確かに言った。

考えてみれば死んだとされていた俺達が実は生きていたと突然現れれば誰だって大なり小なり不信感は抱く。

魔法で姿形を真似る事も可能なこの世界では疑われても当然と言えは当然だ。

「――兄さん先にバス停に言ってもらえるかな？」

思案に更けていた俺は隣りを歩いていた翔が立ち止まっている事に気が付かなかった。

俺の5、6歩後方でやや俯き加減の翔の姿に何やら胸騒ぎを感じた。

「何言ってんだよ？」

「教室にちよつと忘れ物をしてね。すぐに追いつくから。」

「俺も一緒に――」

「大丈夫だから。」

言葉を被せる様にする翔はいつもの様に愛らしい笑顔だったが、胸騒ぎはさらに募った。

「そ、そうか。」

俺はこういう時の翔の詮索せんさくはしない。と言うよりできない。

自分より遥かに優秀な弟の心配をして、これまで取り越し苦労に終わらなかった事はない。

俺は翔を置いて、廊下の曲がり角を曲がりバス停へと向かった。

「――趣味、悪くないですか？」

空虚に言葉を吐きかける翔。

「僕が気付かないわけがないでしょう？」

翔の背後の少し離れた空間がねじ曲がるように歪んだ。

カップのコーヒーにミルクを落とした時の様に景色が渦巻き、色が混ざり合う。

「あたしはさっきの説明じゃ納得できねえな。お前、本当は翔じゃないだろう？」

混ざり合った色が弾けて広がり、そこから飛び出る様にして静琉が現れた。

静琉は下着に近い露出度の高すぎる赤い服の上に前のボタンは全開の七分丈のジーンズ生地の上着を羽織り、かなり際どい所まで切り上がったショートパンツ姿へと着替えていた。

首だけを背後へと向ける翔の顔にいつもの笑みはない。

「日向翔ですよ。どう見たってそうでしょう？」

「何かおかしいってあたしの勘が言ってたんだ。」

「それではどうすれば納得してもらえるのでしょうか？」

「力を示せ。あたしをイカせて見ろよ！ 偽物野郎！」

静琉の首元にあるネックレス状のMRDが強い光を放ち、翔へと踏み出した肉付きのいい色っぽい脚がコンクリートの床を踏み抜く。高速で飛来する静琉が通った後の廊下の窓ガラスが彼女を追う様に碎けて飛散した。

翔の眼前に現れるまでコンマ何秒という速さで距離を詰めた静琉が大きな胸を左右に揺らして正拳を繰り出す。

静琉の拳は風の壁を貫いた様に破裂音を立てた。

翔は間一髪で頭を後ろに倒して交わしたが、常識外れの速度と威力を誇る静琉の拳が掠めた前髪が焦げ臭い煙を上げる。

勢いあまって翔を通り過ぎた静琉が地面に片手をついて、廊下を滑る様に後ろに下がり二人の距離が離れた。

踏ん張らなければ止まれないのだろう。静琉の脚と手が着いた床の表面が削れ、三本のラインを残している。

「がはっ……。」

攻撃したはずの静琉が腹部を抑えて吐血する。

細く括れたわき腹にはつきりと残る殴打された様な痣。あざ

静琉へと冷酷な程に冷ややかな視線を向ける翔の手には本の形状をしたMRDが持たれていた。

「何しやがった？」

翔は答えない。

静琉はショートパンツのポケットから黒の生地にはピンクのレースが飾られたシュシュを取り出し、一度口に咥え、長く艶やかな黒髪を束ねた。

反対のポケットから黒い皮手袋を出してゆっくりと手に嵌める。

「いいねえ。濡れるぜ。――前戯は終わりで、ここからは本番と行こうか！」

両足で踏み切った床が爆発音と共に粉碎し、静琉の大きな胸が上下に大きく揺れる。

入学式の翌日の激闘を終え、やってきた休校日の最後の日。俺は部屋で教科書を読み漁っていた。

今更ながら危機感を持った俺は休校になった数日間をこれまでの人生で勉強した時間を足しても足りないくらいに勉強をした。

色々と魔法について理解する事はできた。

魔法錬成とは言うなればイメージを具現化する事だが、それにはまず術式と言われる物が必要だ。

術式は色々存在し、炎を錬成したり、水を錬成したりする術式がオーソドックスで、この世界で暮らす人間にとっては生活必需品と言ってもいい。

術式は通常インターネットなどで術式販売元からダウンロードしたりする事によって入手する事ができるが、そのほとんどは戦闘では意味を成さない物ばかりである。

普通に考えればそんな危険な魔法を誰でも買える方が問題があるだろうから、それで正しいのだろうが俺が目にしてきた自分の腕を変形させる魔法や、世良羅の雷魔法は明らかに戦闘用といった物だ。その辺りも調べてみると、なるほど合点がいった。

どうやら術式には危険度合いで使用できる者が限定されるようだ。日常でも使う様な危険の少ない術式は庶民でも扱う事はできるが、下手をすれば人に怪我をさせたり、その命を奪うものは魔錬師にのみ使用を許されている。

そしてそんな戦闘用術式の殆どは上級以上の魔錬師やモグリの犯罪者魔錬師によって生み出されているものらしく、望みの効果を發揮する術式を手に入れるのは困難であり、術式形成には最低でも上級師以上に知識が必要な事が分かった。

余談ではあるが、この世界にインターネットに接続するにはMRDがあればいい。

俺達の世界では携帯がなければ生きられないと言えるが、この世界では電話の役目もインターネット接続端末としての役目等、様々な役割をMRDが担う。

術式をMRDにインストールすれば、それで魔法が使えるというわけでもない。

正確にはATモードであれば使用する事はできるが、ATモードで術式を発動すれば眩暈、頭痛、嘔吐、腹痛、関節痛、発熱といったまるで感染症にでもかかった様な症状が出る。さらには簡単な術式であればある程度の精度で発動できるものの、難解な術式では欠損したり、効力が不完全だったりともな発動の仕方はしないらしい。

その点は思念化に乗る人間の【創造力】が関わっているとされているが創造力に関する魔法への関連性はまだ解明されていない。推測の域を出ていないと言う事だ。

術式を入手する時に重要視するのは「その術式を自分は正確にイメージする事ができるのか。」「その術式に必要な魔力の量を必要な場所に注ぎ込む事ができるのか。」「それを発動するだけの魔力量があるのか。」となる。

魔力量というのはRPGなどで言うところのMPだ。マジックポイント魔力量は個々人の才能如何で大きく差がでるもので訓練により上限を引き上げる事は可能なものの一朝一夕で何とかなるものではないらしい。

そこで問題は俺の腕に輝くMRDにはどんな術式がインストールされているのか、と言う事だった。

何故か戦闘用と思わしき術式がインストールされていた俺のMRDには【腕】【脚】【盾】【剣】【砲】と簡素な名前がついた術式

が5つ。それで俺のMRDの保存領域は満タン打ち止めだ。

腕は洞窟で発動した術式だ。脚は腕の脚バージョンだろうと容易に想像できる。

盾、剣、砲もそのままなのだろうが一体どんな形状の盾なのか、剣は両刃なのだろうか片刃なのだろうか、そこまでイメージできなければMTモードでの発動は不可能なのだ。

なまじ無理矢理にイメージをこじつけて発動すれば、ATモードで発動した時よりも歪な状態で発現する事は間違いない。

ATモードで発動すれば大体の形状や効力は掴めるのだろうが、もう二度とあんなにも死んでしまいたい程に気分が悪くなる事はしたくなかったので、俺は腕の錬成だけに専念して特訓する事にして部屋を出た。

(えっと、まずは……)

「虚構よりも真の現実を……」

腕のMRDが光り始め憑代が出現する。

調べてみると憑代は造語みたいなものだった。MRDの操作端末だから、正式には憑代も含めてMRDと呼ぶのだ。

「大地を切り裂き、海を割るその隻腕を振り上げ、憤怒の右腕よ！我が敵を打ち碎け！」

なるべく正確にあの洞窟で見た腕をイメージする。

軽くなる様にイメージを付け加えながら念じると帯魔状態へと移行していく。

帯魔状態は思念化情報の構築が完了し魔力が流動化し始めた状態の事だ。

右腕に魔力を集中するイメージは大体掴んでいる。

目を閉じて、瞼の裏に自分の姿を投影し、それを俯瞰的に見て、全身に満ちている靄もやの様な物を右腕へと集中していく。

恐らくこの靄もやが魔力なのだろう。

右腕に魔力が集中したら、定まらずどこかへ流れていきそうな魔力を固める為に力を込める様なイメージ。

やがて俺の右腕は光り輝きながら徐々に膨らみ出し、その形状を変化させていった。

変形した右腕は左程重くはない。ここまでの道のりは長かったがMTモードで練成すれば大きさや重さに多少の融通が利かせられることがわかったのだ。

しかし、軽量化に重点を置くあまりに術式構成情報からイメージがあまりにかけ離れていると思念化が上手くいかずに、超巨大な右腕が出来上がったり、掌の部分だけが練成されずそのままの状態だったり、変形した腕によく見知った毛並みの腕毛が生えていたり大変だった。

今日は休日最終日なので強度や威力のテストを行う予定だ。
通常より肘から下が一回り大きくなった腕をぐるりと肩を回して振り回す。

前に突き出して引っ込め、手を広げたり握ったりして動きを確認する。

（多少の違和感はあるものの普通に腕を動かすのと大差ねえな。）
左手でノックするように叩くがコンコンと鉄板でも叩いているような感覚で、右腕は痛みはおろか触られている感触もない。

（これならいけるな。）
大きく右腕を振りかぶり、目の前の大きな樹を力一杯に殴りつける。

変形した部分の腕に痛みは感じないが殴りつけた衝撃が肘から上の名前の部分響く。

殴られた樹は接触した部分を大きくへしやげ、やがて倒れた。
力一杯殴ったにしても人間の胴回りくらいの太さは確実にある樹が、まさか折れるとは思っていなかった。

（腕力も上昇してるってことなのか？）

右腕と倒れた樹を交互に見ながら考える。

その後も右腕の考察は続いた。

岩を砕いたり、火にくべてみたり、指先をコンセントの差込口に突っ込んで電気への耐性もテストしてみたりもした、某ツンツン美少女対策である。

どうやら練成された腕はかなりの強度を誇っていて、さらには痛覚や触覚もなくなる様だった。

他の生身の部分は平常と変わらないが、練成された右腕から繰り出される攻撃には不思議と自分の物とは思えない腕力が乗るみたいだ。

普通、パンチの威力は背筋辺りのヒットマッスルだか何だかの影響を受けると言うから肘から下が変形しただけで威力が上がるというのはどう考えてもおかしいが、その答えを見つける術が俺にはないのだから事実をありのまま受け入れる事しかできない。

「兄さん、お婆ちゃんが晩御飯出来たって！」

「もうそんな時間か。わかった直ぐに行く。」

術式の解除方法も覚えた。

元の腕に戻れと強く思い浮かべるだけでいいのだから、練成する時よりも遥かに楽だ。

これで精神を集中してとか面倒臭い手順があったら俺はさじを投げていたに違いない。

囲炉裏のある居間へと移動すると二人が俺を待たずに食事している。

別に待っていて欲しいとは思わないが、それでも待ってくれてるのが家族愛だろうと思ったが口に出しては祖母にしばかれるだけなので止めておこう。

今日の夕食は焼き魚に味噌汁に白米。そしておまけの白菜の浅漬
け。

祖母の家に来てからこれ以外のメニューが出た事がないのは俺の
気のせいではない。

日記をつけているわけではないが、確実に気のせいではない。と
思ったが口に出しては祖母にしばかれるだけなので止めておこう。

「ってか婆ちゃん。俺達が別の世界から来たって事を公表した方が
いいんじゃないか？ 嘘をつき続けるのは疲れるし後ろめたい。元
の世界に戻る協力してくれるかもしれないねーじゃん。」

「あんた馬鹿かい？ 時間移動や不老不死、それと同じくらいに多
元世界移動なんてのは夢の技術なのさ。これだけ魔科学技術が発達
した今も尚ね。そんな所に多元世界からの漂流者です、なんて馬鹿
面ぶら下げて出て行ってみろ。薬漬けにされて、電氣流されて、頭
がち割って中身調べられてご愁傷様フラグさ。」

（それはさすがにないだろ。フラグを使うタイミングもおかしいだ
ろう。それがスタンダードなのか？）と余計な事も考えたがそうと
も言えないかも知れない。

俺達の世界なんかよりもずっとこの世界は死が身近だ。

学校の授業で死にかけるなんて事は俺達の世界ではまずない。

それだけ魔法に関心を持っていて、向上させる意思も強いのだろ
う。

その為ならば人の死さえ厭わ^{いと}ない。そう思っているのも不思議では
ない。

「でも、そんな事言ったら俺達はいつまでも元の世界に帰れない
じゃねえか。」

「手がかりはないわけじゃないよ。」

初耳だ。何の手がかりもないのではなかったのか？ と驚いた俺
はついつい口に含んだ米粒を噴出した。

「汚いねえ。手がかりって程ではないかもしれないけど、分かった事はある。あんたのMRDの構造はあたし達の世界の物とは少し違うと言う事と、その中にインストールされている術式も私達の世界の術式とは異なるデータ構成になっていると言う事。最上級師の眼鏡が言ったかもしれないけど、それは間違いなく機械練成だよ。」

「何でそんな事が出来るんだよ？ 機械練成の術式を作れる者はいないし、俺が思念化できるのは何でだよ？」

「そんなもん、あたしが知るかい！」

（この妖怪婆、肝心な事は何もわからねえんじゃねえか。）

米をかき込み、浅漬けを放り込んでそれを味噌汁で流し込んだ。

結局は何もわからない。それどころか、中途半端に分かった事が増えただけに謎は深まるばかりだ。

「何とかなるよ。今は魔法練成技術を磨く事が先決な気がする。特に兄さんがそのMRDの術式を使いこなせる様になれば分かる事も増えるかもしれない。」

翔はこんな場面では驚くほどに能天気だ。

まったく思慮深いのなら、能天気なのやら我が弟ながら分からん奴だ。

「ああ、それと今後はあんた達の元いた世界を α 《アルファ》世界、こっちの世界を β 《ベータ》世界と呼んどくれ。あっちだこっちだそっちだと余計に頭がこんがらがって考えがまとまりやしないからね。」

どっちでもいいのだが、どっちでもいいから取り敢えず相槌を打っておく。

食べ終えた食器を片付けながらぶつきら棒に「ああ」と返事した。

「ああ、あと——」

（まだ何かあんのかよ？）

「魚は皮まで食べな。コラーゲンがたっぷりだよ。」
「あっ……そ。」

休校日が開け、学校の教室にはつい数日前にあんなに恐ろしい思いをしたにも関わらず、平和な空気が漂っていた。

楽しそうに休日中の出来事を話す者、ガールズトークで何やら盛り上がる女子達。

俺は学校に着いた頃から、また何か危険な事でもあるのではないかと緊張しっぱなしだ。

しかし、平和な空気とは裏腹に、絆創膏やガーゼを貼る者や、よく見れば足を引き摺っている者もいた。

H R 前の喧騒の中、ふと世良羅の席へと視線を送るが、彼女はまだ来ていない様だった。時計に目をやると後五分で遅刻になる。よもや、あの時は気づかなかったが怪我でもしたのではないか、と心配した矢先に勢いよく教室の後ろ側の扉が開いた。

生徒達の視線が一瞬そこに集中するがすぐに何事もなかったかのように友人との会話に戻る。

世良羅が入ってきたのだ。注目を集めたいのだろうか、それとも扉は大きな音を立てて開くのがポリシーなのか、はたまた扉に恨みでもあるのか、本当におかしな奴である。

白いカーディガンは駄目になってしまったのだろうか、数日前と比べれば多少は暖かくなってきたからだろうか今日は上着を着てはいない。

現れた世良羅は高い位置で髪を二つに結んでいて、「くじゃないんだからねっ！」などと言いついそうなくらいにツン属性に磨きがかかっていた。できればデレ属性の方も何とかして欲しいものだが無理は言うまい。

シャツは第二ボタンまで開けており、ブレザーを押し退けて大きな胸の膨らみが誇らしげに顔を出している。さらにはスカートもかなり短く、俺が教師なら「ちょっと短すぎるんじゃないか？」とべ

タなセクハラを試みていたに違いない。

金髪で制服をラフに着こなす世良羅の姿はα世界なら不良の部類に入るのではないだろうか。などと考えながら横を通りすぎる世良羅に顔だけに向けて見つめる。主に胸元と下半身ばかり見ていた気もするが。

下心満載の視線に気づいたのか、眼球だけを軽く俺に向けた気がしたので、若干の後ろめたさから俺は愛想笑いを浮かべて会釈をする。が見事に無視されてしまった。

世良羅が席に着くと同時にチャイムが鳴り、立ち話に花を咲かせていた生徒達が慌てて席に着く。

チャイムが鳴って間を置かずに静琉が入ってきた。

相変わらず教職員とは思えない爆乳を強調した格好で教壇の上に立つ静琉は腕を怪我したのだろうか、左腕を吊っている。

この間は何やら気まずい別れ方だったので気を使ってみる。

「それどうしたんですか？ 大丈夫なんですか？」

飢えた獣の様な眼光を向けられ、俺は恐怖に歪ませ肩を竦めた。

けれど静琉の口から出た言葉は予想外のものだった。

「お兄ちゃん、有難う！ でも大丈夫だから心配しないでね！」

もしかしたら休み中勉強しすぎた影響が脳に出て、不可思議な脳内変換をかましたのかもしれない。

弟属性、もとい妹属性がないとはいいい難い俺だが、爆乳の年上姉ちゃんにお兄ちゃんと呼ばれたいと痛い妄想を抱いた事など生まれてこの方一度もない。

先程の声色は明らかに俺が今まで聞いた静琉の声より3トーンくらいは高いもので満面の笑みで俺に微笑みかける静琉もこれが初お目見えだ。

「ごめんなさい。休み中勉強しすぎたもので。今何て言いました？」

「お兄ちゃんたら、頑張り屋さんなんだから——」

「まってえてい！ あんた休日の間に何があった？ その怪我かそ

の怪我のせいなのか？ 頭を打ったのか？ いや、まさか傷口から未知の菌に犯されているのか？」

やはり聞き間違いではない確かにお兄ちゃんと俺を呼ぶ静琉に半ば半狂乱で食いつき、あまりの興奮に身を乗り出すだけでは飽き足らずうっかり机の上に足をのせてしまう。

「やだなあ。ダーリンのお兄ちゃんはお兄ちゃんじゃない。」

「ダ……ダ、ダダダダーリン？」

何が起こっているのか理解しようと必死に考える。

ダーリンとはそもそも誰だ？

ダーリンのお兄ちゃんが俺と言う事はダーリンという人物は俺の妹か弟かと言う話になる。

俺には妹はいないし、弟も翔一人だけだ。

確かに父親か母親に隠し子や、前妻などがいた場合は存在するのかもしれないが、そんな話は父にも母にも終ぞ聞いたことがない。いや、だが普通はいたとして隠していてもおかしくはない……。

「は……腹違い！」

静寂の教室に俺の奇声が響き渡ったが、前に座る翔が頬を人差し指で掻きながら俺を見上げているのに気がついた。

「何か……僕みたい。」

「何がだ翔。俺達には異父兄弟か、異母兄弟が存在していると言う衝撃の事実が明らかになったのだぞ。貴様は何を冷静に——」

翔の言葉と先程までの俺の考えがリンクする。

「待て、よからぬ事が頭を過ぎったが、まさかとは思うが翔……。」
「う、うん。ダーリンって僕の事みたい。」

屈託なく微笑み、栗色の髪を微かに揺らしながら発した翔の言葉を聞いた俺の膝が落ちる。

机と椅子は俺と共に大きな音を立ててその場に崩れ、翔とのこれまでの日々が走馬灯の様に頭に浮かんだ。

いつも「兄さん、兄さん」と俺の後をついて来て、いつでも俺を立ててくれた最愛の弟、翔。

「に、兄さん大丈夫？」

翔が俺を優しく抱き起こす。

「か、翔……。お前が選んだのなら兄さんは反対はしない……。だが最後に兄として一言だけ言わせてくれ……。俺にもたまには揉ませてくれ、ガクッ。」

「も、もま？ にっ、兄さーん！」

性格は及第点どころか落第点すらやれないほどだが、確かに見た目の感想を一言で言えば、静琉は爆乳美女の一言に尽きる。

そんな静琉と交際していると言うあまりのショックな告白に下心のみで構成されている遺言を言い残して俺は力尽きた。

と思われたが、それくらいのショックでピチピチの十七歳である俺が力尽きるわけもない。

平均年齢をとうに過ぎたお爺ちゃんならいざ知らず、俺くらいの若年でショックによる心臓発作で命を落とす者などそうそういるはずもない。

ショックに揺れる膝を抑えて立ち上がる。

「何故そんな事になっているんだ？ 俺の知らない間に何故、そんなエキセントリックな事態に！」

「翔ってね……。すごいの。」

右手の人差し指を口に当てて顔を背けて頬を赤らめる静琉に膝が大きく左右に揺らぐ。何とか膝を押さえつけて踏み止まった俺の腰からも力が抜けていくが、ここで倒れるわけにはいかない。

「に、兄さん。」

翔がこのひと時の間に随分とやつれてしまった俺に耳打ちをした。どうやら、俺達の秘密を守る為に仕方なく交際する羽目になったのだと言う。

詳しい事情はここでは説明できないと言うが、当たり前と言えば

当たり前だ。

目の前には静琉もいれば、クラスメイト達もいる。帰ってからゆっくり聞くことにしよう。もちろん彼女とはどこまでいったのかも。むしろそっちが本題だ。

「HRも授業も始めないのなら私、帰っていいですか？」

突如として、窓際最後尾に座る世良羅が机を叩き、立ち上がり様に言い放った。

勢いよく立ち上がった世良羅の二つに結ばれた金色の髪が、たわわに実った稲穂の様に揺れ、これまたたわわに実った胸部も大きく上下した。

顔には当然の事ながら、激しい嫌悪と怒りの色が満ち満ちている。一時後方へと奪われた視界を正面へと戻すと、そこには豊満な胸を強調するかの様に胸を突き出し、腰に手を当てて、同じく嫌悪と怒りの表情をした静琉が世良羅を睨み返している。

今回の件に関しては世良羅の怒りに関与していない。とは言えなくもない俺としては何とも気まずく、彼女には後ろめたさも多大にある為に掌にはじつとりと嫌な汗が噴出した。

「――さあてと窓際のビッチが何やら五月蠅いのでHRを始める。」
悪びれる様子を微塵も滲み出す気配なく、静琉が教壇へと戻る。振り返り際に翔にウインクをして。

世良羅も納得はしてはいないようではあるが、HRを始めてくれるのならこれ以上言いたい事はないのか、聞きなれたソプラノの「ふん。」を一つくれて、席へと着いた。しかし、視線は窓の外へ。HRを始めると言っておいて真面目に聞く気はなさそうだ。

静琉が出欠を何事もなかった様に取り始め、一人呆けて立ち尽くす俺は椅子が床と擦れる音を立てないようにそっと椅子を引き、これ以上視線を集めぬよう気配を絶って席に腰を降ろした。

出欠を取り終えた静琉はバインダー状の黒い厚紙で出来た名簿を

音を立てて閉じた。

翔との交際が始まったからか、他の生徒には今まで通り「クソ」だの「カス」だのを名前の上部に付け加えていたが俺は「お兄ちゃん」と呼ばれた。

まさかこれからはそれで通すのではないかと不安になるが、猛然と抗議したところで静琉の見事なまでに捻じ曲がり、スパイラル状になっているのではないかとさえ思われる人格を変える事など俺には出来ようはずもなく、さらには世良羅に叱責される事を恐れた俺はついに欠けを取り終えるまでの間、言葉を発する事はできず、膝の上で拳を握り締めて他のクラスメイト達の視線による羞恥に耐え抜いた。

名簿を教卓の上に放り投げた静琉が背後のホワイトボードにマーカーで文字を書き始めた。

余談ではあるが、俺達の世界の高校はほとんどが黒板にチョークの組み合わせだったが、こちらの世界では黒板事体が存在しないのか、ホワイトボードを使用する様だ。確かに中学の頃に少し通った塾などはホワイトボードを使用していたし、さして不自然と言う事でもないが、ホワイトボードに少し大人びた印象を抱く俺は違和感を多少なりとも感じている。

静琉がホワイトボードに書き出したのは二つの言葉だった。【バディー】と【パーティー】だ。

「何故、魔立の学園が設立されたのか、勿論皆知っているな？」

先程までとは打って変わって真剣な面持ちの静琉は教師の風格があった。青みがかかる程の黒い髪と黒い瞳は真剣な顔を見ると不思議な威圧感を放つ。

心の中で（当たりません様に）と祈る。ややもすると手を顔の前で擦り合わせそうになるが、そんな態度を取ると当てられてしまうのがお約束なので制服のズボンを握り締める格好で上がりそうになる両腕を縛り付ける。

「なら、そのちっこい——ええつと。チビ栗崎^{あわさき}。」

静琉の教鞭の先にいた男子生徒が当てられて机から立ち上がる。栗崎と呼ばれた男子生徒は確かに小柄で身長は百五十センチにも満たないだろう。色白で真面目そうな青年。と言うよりも少年といった印象を強く抱いた。女性的な印象の翔とは異なり、幼い子供みtainな雰囲気^{ふんぎ}の少年だ。

「はい。我が魔立学園は違法魔練師に対抗する魔練師の育成、及び魔科学技術発展の為の優秀な術式開発者養成施設です。」

「正解だ。さすがは入試成績で主席のダーリンに次ぐ成績だっただけはある。ガリ勉強郎が……。」

貶^{けな}しているのか褒めているか分からない言葉を吐き捨てる静琉。その言い草だとガリ勉の栗崎よりも成績の良かった翔も貶^{けな}す事になるのではないかと素朴な疑問を抱いた俺を置いてけぼりにして静琉は続けた。

「まあそんなわけで貴様らは強くならねばならん。ダーリンはもう官能的に強いからいいのだが。」

（こいつは官能的って言葉の意味を知っているのか？ 知っているのならただエロそうな言葉を使いたいただけなんじゃないか？）

「知っての通り、我々の魔法には大きな隙や弱点が生じる事も多い。ゆえに任務に当たる際には【バディー】と共に行動するのが基本だ。さらに危険な任務や二名での遂行が不可能な任務には【パーティー】と呼ばれるバディー三組編成で当たる事になる。まだひよつこの貴様らでもこれに例外はない。もちろんひよつこにダーリンは含まない。」

度々《たびたび》翔をダーリン呼ばわりする静琉に憤慨^{ふんがい}しながらも予想外の展開に驚きを隠す事に神経を集中させる。

静琉の問いに栗崎は魔立の生徒は違法魔練師に対抗すると当然といった風情で言った。

この世界に警察が存在しないと言う事はないだろうが、多少の魔

法を使えるにしても魔練師に対抗するほどの強力な戦闘魔法は使えないのだろう。その為に魔立の生徒達である俺達が違法魔練師と対峙し、逮捕また駆逐を行うと言いたいのだ。

しかし、そんな事はα世界からの漂流者である俺にとっては御免蒙りたい。

どんな凶悪犯罪が横行しているか知らないが、危険な事に巻き込まれるのを極力避けるのが俺の十七年の人生で得た常識だ。

「――まあまだ貴様らに任務についてもらう事はないにしても、今からバディーやパーティーでの戦闘に慣れておく必要がある。」

俺はほっと胸を撫で下ろした。いくら魔法練成技術の向上がα世界に戻る為に必要な事とは言え、死んでしまつては元も子もない。それでも数日前の体育館での事を思うと今だ安心は出来ないが、重くなった気持ちは幾分か軽くなった。

「それじゃあ、時間も押している事だし、さくさくバディーを決めるとするか。」

静琉は再び教卓の名簿を開き、唇に人差し指を添えて考える格好を始めた。

暫し唸りながら思考を巡らせた静琉であったが、「適当に仲の良い者同士で組め。」とあっさり放り投げた。生徒達は待ってましたばかりに席を立ち、仲の良い者同士寄り合い、瞬く間に教室中に歓談が広がった。

漂流者ゆえに友達もない俺だけは勝手に決めてもらった方が気が楽で良かったと惜しがりながらも翔と組めばいいだけか、と思いつ手を翔の肩へと忍び寄せた。が瞬きを一つする間に紺色のブレザーを着た後姿が忽然と俺の眼前から姿を消した。

微かに見えた残像が行く先を目で追うと教壇にいる静琉に抱えられた翔が憂いの眼差しを俺に向けている。周知の通り俺に翔を救い出す術はないのだが一応の抵抗を試みる。

「あの、御手洗先生？」

「静琉でいいよ。お兄ちゃん。」

艶やかな黒色の前髪から除かせる吊り上った大きな切れ長の瞳に似つかわしくない満面の笑みを添えて俺に言い返す静琉。

「し、静琉さん。俺、翔とバディを……。」

「ダーリンは勿論あたしとバディを組むに決まっているじゃない。」

「静琉さんには他にバディがいるのでは？」

「大丈夫。奴もあたしとバディを解消したがっていたから問題ない。それにこのクラスは三十一名だから必然的に一人余る。力量的にもダーリンに釣り合う奴はいないのだから当然こうなるわけ。」

静琉のバディの心情に妙に共感した俺はそれ以上は追えずに翔に「すまない」と心の中で謝罪をして辺りを見渡した。

他の生徒達はすでに相棒を確保した様子でいそいそと席を移動し始めている。バディはこれから学園内ですべての行動を共にする

仲なのだから当然席も隣同士となるのが通例なのだろう。

騒然となる教室の中で一角だけが時の刻みを止めているのに俺は気がついた。

楽しげな表情が溢れる周囲とは相反する物憂げな表情で窓の外に視線を落とす少女。

空間から隔絶された少女は無関係を装いながらもどこか悲しげだった。

正直彼女に対して良い印象など欠片もなければ背徳感すら覚えている身の上であったが、自然と足は彼女の方へと向き、歩みは俺の意思に関係なく運ばれた。

横に立ち、頬を指先で掻く仕草をしながら言葉を掛けられずにいる俺を恨めしげな表情で見上げた世良羅は桜色の唇をゆっくりと開いた。

「何か用でも？ お兄ちゃん。」

敵意むき出しに嫌味を口にして、たじろぐ俺から視線を外し、窓外へと再び視線を振る世良羅に俺は抵抗する喉を無理矢理開き、身を引いたまま言葉で追いつがった。

「バディー、決まってるじゃないなら、俺と。」

緊張の所為か唇は強張り、声が震えて片言になる。

女子と話すのは元々得意な方ではないが、普段はここまで酷くない。

人間離れた世良羅の美しさとこれまでの経緯が俺を出来損ないのロボットの様にする。

「このクラスの人数だと一人余るでしょう？ 私は一人でいいわ。」

「それが……。翔が静琉さんと組みたいで……。」

突如として立ち上がった世良羅がすらりと長い片足を支点にして素早く俺の方を向き、右手の人差し指で俺の胸をついた。

「君、あの洞窟での事を忘れたの？ バディーって言うのは互いに命を預けあう相棒なの！ あの時は一時的な事で私としてはもの凄

く不服だったけれど、私と君はバディーと言える状態だった。けれど君は恐怖に立ち竦むだけで私の窮地に助けようとする素振りすら見せなかった。そんな君が私のバディー？ 笑わせないでくれるかしら！」

早口に捲くし立てた世良羅の指が俺の胸元に言葉を放つに従って食い込んでいくような気がした。

すべてを言い終えた世良羅は随分と興奮した様子で頬を薄く桃色に染め、息継ぎもせずに捲くし立てた肺は急激に酸素を欲し、喉を働かせた為、はあはあと桜色の唇が上下し息が漏れている。

傍^{はた}から見ればまったく世良羅の言う通りで、その件に関して言い訳などしてはならないと頭では分かっていたのだが、俺とてそこまです制の効く思考は持ち合わせてはいない。

心が言っではならないと警鐘^{けいしょう}を鳴らしていたが、俺の脳はそれに逆らい唇と喉に動作信号を送信した。

「――助けようと思った！ 助けたかった！」

突然の大声に世良羅の指が胸元を離れ、周囲の喧々たる空気は両断された。

「ふ――」

世良羅の瞳が水気を帯びた気がして、胸が恐々と鼓動を早めた。

「ふざけるな！」

世良羅が指に輝くMRDを起動させて、周囲にいた生徒達は悲鳴を上げて大きく飛び退いた。

細長く白い人差し指の先がチリチリと稲光^{いなびか}るのを感じ俺は身構えたが逃げる事はしなかった。避けてはならない気がした。

刹那。世良羅の指先が大きく光り、俺の視界を眩^{まばゆ}く遮った瞬間。俺は何かに押されて吹き飛ばされた。

訳も分らず吹き飛ばされた俺は机と椅子を弾きながら、窓際から廊下側まで身体を滑らせた。

廊下側の壁に打ち付けられ、慌てて身を起こすと静琉が両足を大きく開き、両手を突き出す格好で俺と世良羅の間に割って入って

た。

世良羅へと突き出された静琉の右手からは硝煙が一筋揺らめき、肉の焦げる生々しい臭気が教室中に立ち込め、俺へと突き出された左腕は覆っていたギプスの手首から先が碎けて生身がむき出しになっている。

「あたしの両手を駄目にする気か？」

静琉が体勢をそのままに交互に俺と世良羅に鋭い視線を投げる。

殺意を帯びた眼光におの懔き、両手両足を拘束されたように恐怖に動きを制限された。

「バディーが決まっていけないのがお兄ちゃんと千早だけである以上、二人にバディーを組んでもらう事になる。――がしかしだ。」

大袈裟に一呼吸入れて静琉が姿勢を正して首元のMRDと思わしきネックレスを焼け爛れた右手で握り込む。静琉のMRDが輝きを増し、紫紺色の光が教室全体を包んだ。

「どう言う事ですか？ バトルフィールド これは仮想戦闘領域じゃないですか。」

何やら腰を落とし構えを作る世良羅に静琉は不気味な冷笑を返した。

先ほどまで教室だった空間が紫色の壁面に覆われた教室から一回り小さくなった空間へと変貌している。紫色の壁面はやや透き通っていて色のついたガラスの様だ。

呼吸はできるので空気は存在している様だが、匂いがない。

紫色の床面は教室のフローリングと硬度に変化はないが、第六感はこちらが別次元であると確かに言っている。

周囲にいたはずの生徒達は姿を消し、その場には俺と世良羅、そして中央で冷笑を浮かべる静琉のみがいた。

すぐに合点がいったのは、体育館が洞窟に変貌した事と同種の事象を静琉が起こしたのだらうと言う事だけ。その理由までには思考の触手は届かない。

「教室で暴れられては困るからな。洞窟での経緯も知っているからには無理矢理組ませるわけにもいかん。千早がお兄ちゃんと組みたくないのは彼に力がないと思うからなのだろう？」

ここまで静琉が話した所で俺は彼女の真意を察した。恐らく静琉も同様なのだろう。口をきつく結んで、静琉に向けていた構えを俺へと向けなおす。

「お兄ちゃんがあそこでお前を助けなかったのは、不完全なMRDと不完全な術式の所為だとあたしは説明を聞き、一応の納得はしたのだが、お前は当の被害者なのだからそんな説明で納得する事はできないのだろう。」

「――私は誰ともバディーは組まない。」

静琉の問いかけに若干噛み合わない気がする言葉を呟く世良羅の表情には俺へと向けられていたものとは明らかに異なる怒りとも悲しみともつかない複雑な色が漂っていた。

「お兄ちゃんが勝てば、めでたく二人はバディーだ。千早が勝った場合は仕方がないのでしばらくは二人とも単独でいる事を特例として許可しよう。それでいいな？」

世良羅が細い輪郭を前に少し傾ける。俺には選択肢などあろうはずもなく。流されるままにMRDを起動させ、臨戦態勢を整えた。

「勝敗はどちらかが降参するか、あたしが危険と判断して止めに入るまでだ。あたしが止めに入った場合の異論は聞かないからな。」

「小姑こしやうとだからって最前ひじきはなしにして下さいね。」

「あたしはこと戦闘に関しては私情を挟まない。そこは信用してもらうしかないな。」

俺は即座に唯一錬成する事のできる術式を起動させる。

「大地を切り裂き、海を割るその隻腕を振り上げ【憤怒の右腕】よ！
我が敵を打ち砕け！」

手早く右腕を錬成した俺に二人は驚きを隠せない様子だったが、

世良羅の顔にはすぐに怒りの色が滲んだ。

「あの洞窟で何故今みたいに術式を発動しなかったのか？」と顔に書いてある。当然の怒りだが、俺がこれをまともに錬成出来る様になったのは、つい前日の話で、あの時は本当に魔法のまの字も知らなかった。とはいえ、そんな言い訳を繰り返した所で時すでに遅し。世良羅は聞き入れはしないだろう。

別に勝ちたいわけではなかった。世良羅とバディーになりたいと心から望んでいたわけでもない。さっさと降参しても良かったのだが、俺にだってプライドはある。

ただただ証明したかった。もう二度とあんな事にはならない。次に同じ場面に陥れば必ず助ける。それを力を示して証明したかっただけだ。

世良羅も憑代を立ち上げ、何やらキーを打ち始めた。手元から発せられる独特な紫光しきうが顔と髪を照らしている。金色の髪と両眼に混ざり合った紫光は何ともいえない幻想的な彩を湛える。

「【雷槍】発射準備。防衛術式展開——」

世良羅がゆっくりと俯けていた顔を上げ、大きく開かれた愛らしさと美しさの両方を兼ね備えた瞳が俺を真っ直ぐに捉える。

静琉が交互に俺と世良羅に見やり、小さく頷くと、乱暴な応急処置をした様な乱雑に布の巻かれた右腕を高らかと上げて、寸分の間の後に素早く振り下ろした。

「神々の畏れたる雷鳴よ、我が猛る怒りをその神槍に宿し——【雷槍】よ我が敵を穿て！」

言葉と同時に突きだされた指先から電撃が迸る。落雷が重力に逆らい水平に飛来する様は俺に大きな恐怖を与える。超高速と呼べる速度で俺に向かう電撃だが、辛うじて目で追う事ができる。

俺は右腕を顔の前に置き、電撃を受けとめた。

激しい衝撃と光の爆発に俺は後方へと吹き飛ばされて思わずきつ

く目を閉じる。

「序歌を省略——」

声に反応し、慌てて目を開く。土煙で姿の見えなくなった世良羅の気配を初弾の立ち位置からやや左に感じ俺は首だけを左に振る。その瞬間小さな光を目の端に捉え、慌てて右腕を光の高さに合わせて振り出す。

寸での所で落雷を右腕で遮る事に成功するが、初弾ほどではないにしろ、かなりの衝撃が肩口に激痛を走らせる。

「正直、二発目まで止められるとは思っていなかったわ。やっぱり君は力を隠していたのね。——卑怯者。」

「ちが……。」

出かかった否定の言葉を飲みこんだ。

もう言い訳はしない。勝って、それで聞いてもらおう。もう二度とあんな風に何もできずに立ち尽くさなくて力をつけたのだと。世良羅の電撃の威力は予想以上だった。一撃目は真正面から受けたにも拘らず、後方へと身体を吹き飛ばされる程の威力があったし、序歌を省略した魔法ならば軽々と耐えられると思っていたのだが体制が崩れた状態では肩が外れるくらいの衝撃はあった。

生身の部分に当たれば、一撃で立つ事もできなくなるかもしれない。

唯一の救いは俺の右腕は絶縁体素材で出来ている事。それは右腕の検証をした時から判明していた。

電撃が飛来する速度から考えても、いつ直撃を食らってもおかしくはない。

俺は我武者羅に世良羅へと踏み出した。接近戦なら確実に俺に分がある。

俺の右腕は耐久力も然る事ながら、岩をも砕く腕力も兼ね備えている。人間相手なら一撃で戦闘不能に陥らせる事ができるはずだ。女性を殴る事は、特に世良羅の様な絶世の美女を殴る事には気が引

けるがこの際そんな事は言っていられない。かなり加減すれば大丈夫だろう。

世良羅は飛び込む俺に容赦なく電撃を放った。序歌を省略すればかなりの速度で連射が可能になるようで、中々距離を詰める事ができない。焦る俺だが飛来する電撃の速度にも徐々に慣れてきていた。

一閃の電撃を足元に叩きつける様に右腕で叩き落とす。紫の地面に激突した電撃がジジッと電子音を鳴らし土煙を舞い上げる。初弾で分かった事だが、砂地でもないこの空間でも地面に激しい衝撃が生まれると不思議な事に土煙が上がるようだ。原理は解らないが、遠距離から攻撃する手段のない俺にはかなり有利に働く仕掛けだ。これを利用しない手はない。

土煙の間を縫って世良羅との距離を一気に詰める。俺が飛び出したのは狙い通り、世良羅の左脇。振り出せば右腕をクリーンヒットさせられる位置だ。

右足を踏み込み、身体を捻って世良羅の腹部目掛けて振り抜く。俺の右腕がブウンと風切り音を立てて世良羅の身体を素通りする。触覚のない腕でも何かを殴った時の衝撃は生身の肘や肩の部分から伝わってくるはずなのだが、その手ごたえがまるでなかった。

「防衛術式【電影^{でんえい}】。」

俺の拳が通り抜けた世良羅の身体は、モニターに映し出された映像が砂嵐に変わるが如く大きくぶれながら消滅した。振り出した右腕の肩越しから声のした方を覗くと世良羅が両手の掌を俺の方へ向けて突き出す直前といった構えで待ち構えていた。

（誘い——込まれたのか？）

「双肩に宿りし至高の輝きよ、両腕を駆け抜け、我が敵を破碎せしめろ！ 【雷槌^{いかづち}】！」

世良羅の細い両肩から差し出された掌へと電撃が走り、電撃の流れに合わせて突き出される両腕が俺のから空きの右脇腹へと突き刺さる。

バチツと大きな音と共に身体がばらばらになってしまったと錯覚するほどの衝撃が走る。

身体をへの字に曲げて俺は地面を転がった。

呼吸ができない。指先一つも動かない。接触の瞬間。血液が沸騰した様にぶくぶくと音を立てた気がした。

霞みがかった意識を辛うじて繋ぎ止める。魔法の恐ろしさと威力を初めて痛感した。

バス亭で帯魔状態の世良羅に触れてしまった時も似た感覚を味わったが殺傷力が段違いなのが身に染みてわかる。あの時と違い下手に意識を保っているから余計になるのだろうか。痺れが多少和らいだ今となっては痛覚の戻った脇腹が火傷した様にひりひりと痛んでくる。

「勝負ありね。これで私は単独で——」

「いいや、まだ終わってはいないさ。お兄ちゃんはぎりぎり腕を引き戻していたからな。」

「ひいき鼻肩はなしって言ったじゃない！」

水平に切り揃えられた黒色の前髪から覗く瞳を少し細めて静琉が感心したように口にした言葉を聞き、激昂する世良羅。

俺は身動き一つで軋む右の脇腹を左手で抑えながらゆっくりと立ち上がった。

「嘘じゃねえさ……。ぎりぎりだったけど間に合った。」

そう。確かに俺は右腕を引き戻して、世良羅の掌と腹部の間に差し込んだ。

けれど変形している腕の境目である肘を差し込んだだけで絶縁効果はほとんどなく、右肘も酷く痛めてしまっただけで動かせない。まんしんそうい満身創痍とはまさにこの事だ。

改めて自分の身体を見ると、右半身の制服は破れ去り、右肘と右脇腹に酷い火傷の跡がある。

（ここまでの大怪我をしたのは初めてだな。）と逆に冷静になってしまい、自嘲が込み上げた。

「でも、その怪我じゃ、もう……。」「

怪我を負わせた本人である世良羅が痛々しげに俺の右半身を見て声を振るわせた。

確かにその通りだ。高らかに続行宣言をするには傷が深すぎる上に唯一の武器である右腕も完全に御釈迦だ。おしゃか

でも……。

「でもな。あんたには証明しないといけないんだよ。もう二度とあんな事にはさせないってな。」

憑代を待機モードから制御モードへと立ち上げ、再び【腕】の術式を起動させる。

試した事はないし、出来るかどうかは分からないがやるしかない。

「大地を切り裂き、海を割るその隻腕を振り上げ【哀哭の左腕】よ！我が敵を打ち砕け！」

左腕を突き出し、思念化に入る。

完成イメージを脳内構築し、魔力を左腕へと注ぎ込む。

流動化で魔力を注いでいると「いける。」と表現し難い感触があった。

左腕が光を帯て見る見るうちに形を変え、右腕と同様の形状を象る。

慣れないせいかイメージにブレを感じると同時に不完全な左腕も僅かにブレるがここまでくれば気合の問題だ。精神を集中し魔力を左腕へと集束させていく。

「科学だの魔法だの言ったところで……人間、最後は気合なんだよ！」

訳の分からない雄たけびを上げながら、高らかに左腕を掲げると、太い蛍光灯の様な光の塊へと化した腕がその輝きを迸らせる。

「ひゅう」と静琉がわざとらしく口笛を鳴らす。

恐る恐る掲げた腕を見上げると、やや不恰好ではあるが確かに変形していた。鉄とも土ともいえない独特の素材。無骨な左腕が無機質に聳え立っている。

「さて、第二ラウンドといこうか。」

何が可笑しいのか自分でもわからないが、ピンチには笑顔と相場は決まっているのだからここで敵に笑顔を見せないわけにはいかない。引き攣った笑みを浮かべる俺を呆然と見ていた世良羅の顔に再び戦闘の意思が浮かび上がる。

「ば、ばっかじゃないの？ し、死んじやっても知らないんだからね！」

世良羅は指先から電撃を発し、攻撃を再開するが、動揺しているのか先程までの速度もなければ威力もない。

脇腹の激痛に一步踏み出すのも憚られるが、勝算がまるでないわ

けでもない。

明らかに世良羅は動揺しているし、手の内は大体把握した。

世良羅の魔法は三種。遠距離攻撃用術式の【雷槍】と近距離攻撃用術式の【雷槌】。それと自動展開させている、防衛術式【電影】だ。

今の精神状態から、他に術式を所持していれば遮二無二放つてきてもおかしくはないが、そうしないと言う事は恐らく所持している術式の数は三種で間違いないのだろう。

確たる証拠はないが今はそれに賭けるしかない。

攻撃術式の攻撃パターンは一直線に電撃を飛ばす術と掌底に電撃を帯びて突き出す術と単純なもので、注意すべきは防衛術式【電影】のみ。

敵の攻撃を寸前で避かし、残像を攻撃させる術式でそれ自体に殺傷能力はない。もしかしたら、連続使用も可能なかもしれないがその可能性は限りなく低い。何故なら発動待機時間スキルデレイのない術式は少ないからだ。それが無い術式には面倒な手順や条件があるものが多いと確かに教科書に記述されていたのを覚えている。

微かな可能性に賭けて、嫌がる身体を無理矢理に引き摺ずる。

落雷を避けながら一步、また一步と距離を詰める。傷の痛みで機敏に動く事のできない身体を電撃が時折、掠める。

土煙を利用したの接近ではまた残像と入れ違えられても気づけない恐れはあるが、まだ世良羅が動揺している間に決着をつける必要もある以上のんびりはしてはいられない。

世良羅まで残り数歩の所で俺は左腕を地面に打ちつけ土煙を立てた。

最後の力を振り絞って大きく踏み込んで距離を詰める。電撃が土煙を貫いて飛来した。俺は紙一重で反応し危うく鼻っ柱に直撃しかけながら、前髪を焦がしてそれを寸前で避ける。

先程と同じく世良羅の右脇に飛び出し攻撃を繰り返す。予想通り、

世良羅を捕らえた攻撃が手ごたえなく外れ、残された残像がドット
の光となり淡く輝いて消え去る。

「何度やっても――」

世良羅が両手を突き出した構えを取りながら、はっとして驚きに
目を丸くする。

空振った俺の攻撃は左腕で繰り出されたものではなく、右回し蹴
りだったからだ。

俺には世良羅がどちらから攻撃に移るか分かっていた。

彼女は動揺していても冷静に敵の弱点を付く事を忘れたりはしな
い。そうなれば確実に負傷した俺の右半身を狙う。そう確信してい
た。

浮いた身体を振りぬいた右足の力を利用して左に大きく捻^{ひね}る。無
理な動きと姿勢に引き絞られる身体がぎりぎりと言を立てて痛んだ。
俺の左腕と世良羅の両手が交錯して炸裂音と共に接触していた互
いの身体は引き剥がされる様に吹き飛ばされた。

俺の必死の抵抗はここで終わり。

右半身の激痛と脳を大きく揺さぶる激突の衝撃にものの見事に意
識は分断された。

嗅^くぎ覚えのある不快で、それでいて落ち着ける芳香が覚醒した俺
の鼻を擦^{くすぐ}る。

重い瞼^{まぶた}をゆっくりと開くと一度は見た事のある白い天井。縦横の
ラインが規則正しく交差し、大きなマスを描いている。

純白で染め上げられたシートが身体を包んでおり、少し動くとツ

ツツツと小気味の良い独特の衣擦れ音を鳴らす。

身体中が軋むように悲鳴を上げ酩酊感に吐き気を催すが、動けない程ではなさそうだ。

「……また保健室かよ。」

白い天井に悪態を一つ。

「気がついたみたいね。言っておくけど手加減はしてたんだからね！ 君がしつこいから、つい……」

聞き覚えのある声に瞳だけを動かして「またあんたか……」と悪態をもう一つ。

「またって、いつもいつも絡んで来るのは君じゃない！」

意識が朦朧^{もうろう}としていて言い返してやろうにも上手く神経を逆撫でできる言葉が出てこない。

傍に腰掛ける世良羅の髪を少し空いている窓から差し込む風が微かに揺らす。

顔に当たる風に気持ちよさそうに目を細めて窓外に視線を巡らせている、彼女の細く長い睫毛も微かに揺れている気がする。筆舌に尽くし難い美しさに目を奪われると同時に感傷が沸々と湧きあがる。言いたい事を言うならば今だと心の奥でもう一人の自分が叫んだ様な気がして、言葉が唇をこじ開けて溢れだした。

「一応心配はしてくれたみたいで、有難うな。何だかムキになっちゃってさ。あの時、本当は助けたかったんだ。けどその力が俺にはなくて。それで……」

外へと投げた視線を戻す事なく、彼女は冷ややかな細い指先を俺の下唇に置き、言葉を遮る。

「もういいから。弟君に叱られちゃったし。」

勝敗が決し、通常空間の教室に戻った俺達を出迎えた翔が意識のない俺に駆け寄り涙ながらに言ったらしい。

「兄は絶対に人を見捨てたりしない。深く悔やんで休みの間中、普段は絶対にしない勉強を必死でして、魔法練成の特訓もしていた。」

そんな柄にもない事をしたのは貴方をあの時助けられなかった後悔の所為だ。二度と同じ事を繰り返さない為に。兄はそういう人間だ。」と。

相変わらず出来た弟だと嘆息を漏らしたが「実兄だからって持ち上げすぎだな。」と照れ隠しの言葉も口にしておいた。

「本当にそうよね。まるで私が悪者みたいな雰囲気になっちゃったじゃない。」

「そいつはすまなかったな。」と俺は痛む身体を引き起こした。

俺が身体を動かせるのを確認した世良羅は腰かけていたパイプ椅子からゆっくりと腰を上げて、「それじゃあ。」と小さく呟いて出口へと向かった。

呼び止めたい気持ちに駆られたが何を言えればいいのかわからず後姿をただ見送った。

出口の扉を少しだけ開いた世良羅は決して振り返る事はせず、首を少しだけ横に向けて言った。

「今度は、ちゃんと守ってよね。……あ、相棒。」

微かに見えた横顔を耳まで紅く染めていた。言葉に理解が及ばない俺は目を瞬く。^{しばた}

「それは……」

俺の問いかけも聞かずに力一杯に保健室の扉が閉ざされ、呆氣に取られた俺は左手を少し持ち上げる格好で情けなく停止した。

訪れた静寂を翔があっさりと破って現れた。また出入り口で盗み聞きしていたのか、あまり見慣れない卑しい笑顔でベットに近寄り、世良羅の腰かけていたパイプ椅子に腰掛けて、接合部をぎしりと揺らした。

「……バディーを組むんだってさ。兄さんと。」

「は？ 誰が？」

事情の飲み込めない俺が頓狂な問いを返すと翔が詳しい事情を説

明してくれた。

翔が世良羅に説教した後、俺を保健室に運んでくれたのは世良羅らしい。

あの細い身体でよろよろと覚束ない足取りで俺を担ぎ、長い廊下を進んで行く世良羅に他の生徒達や翔はもちろん手を貸そうと駆け寄ったそうだが、「わ、私の、あ、相棒だから！」と顔を真っ赤にして助力を頑なに拒んだらしい。

何が彼女のツボを押さえたのかわからないが、どうやら俺とバデイーを組む決心を固めたらしい。

つまりは俺が彼女を見捨てようとしてはいなかった気持ちだけは一応の理解は得られたと言う事だろう。

嬉しいような悲しいような。複雑な気持ちである。

確かにあんな美女が相棒なのは幸せな事だろうし、下心を抜きにしても今の俺よりは数段実力もあるのだから心強い。けれど、「相棒を組むだけでこれじゃあな。」と大仰な手当てをされたミイラ男状態の半身を見やり深い溜息をついた。

異世界での始めての友達作りに成功した喜びに満ちているはずが、そんな色は微塵も浮かんでこない陰鬱な眼差で窓外を見下げるとすっかり黄昏が広がっていて、妙な既視感に再び重い吐息が口をついて出た。

恐怖の魔法バトルから一週間が経ち、俺の怪我也随分と良くなった。

β世界の治療技術は凄まじく。傷薬代わりの治癒魔法なるものを翔が毎日施してくれたお陰で多少の痛みは残っているものの殆ど完治と呼んでいい状態だ。

さらには鎮痛術式だか何だか訳の分からない治療を保険室医が俺が眠っている間に施してくれたらしく酷い怪我をしていた実感すらもあまりないままにこの状態になったのだが。

教室で行われる授業はα世界とそう変わらず退屈なもので、その辺はどちらの世界も大差がないのだと知った。しかし、時折授業に組み込まれる実戦形式の魔法錬成実習は命懸けの過酷なものだ。α世界で言うところの体育に変わる単位なのだろうが、危険度はそれの比ではない。下級魔錬師であっても扱う術式には危険なものも多く、寸止め形式で行われる組手の様なものなのだが、魔法錬成技術の未熟な下級魔錬師達では上手く制御出来ない事もあり、ふざけていれば大怪我に繋がるので俺も必死で取り組んだ。

世良羅はと言うと、俺に対する態度にあまり変化はなく。声を掛けても十中八九は無視されてしまう。

席は隣通しになったので、会話はできなくとも美しい横顔と得も言われぬいい香りをさせている彼女の至近距離にいられるのは唯一の役得だろう。と言うよりも口を開かないければ絶世の美女。口を開けば唯我独尊ゆいがどくそんの女王様なので、会話が成立しなくてもさほど問題はない。いや、むしろその方が平和だ。

今の所、実習でも二対二のバディー戦闘を行われる事はなく、一

対一形式だったので俺と彼女との距離が広がったり狭まったりするフラグ成立イベント等は起ころうはずもない。

「奔っち。一緒に飯食わね？」

浅黒く焼けた肌に赤髪のツンツン頭をした男子生徒が声を掛けてきた。身長は俺より少し高く、百八十センチはあるだろうから、十分に長身と言える。

俺にもこの一週間で友人が出来た。彼がその一人である^{あだちしかの}安達鹿之助だ。^{すけ}

鹿之助は世良羅と超絶バトルを繰り広げた俺に興味を示してくれたいらしい。彼だけではなく。勇敢に世良羅と戦った俺に対しては他の生徒も多少なりとも好感を抱いてくれた。

俺は鹿之助の申し出を快く了承し、学園の屋上へと昼食をぶら下げて向かった。

我等が^{まりつおうちゅつがくいん}魔立謳術学院は生徒の自主性を育むだか、自由で楽しい学園生活をだかで校則なんてあってないような学院だ。その証拠に制服は着崩し放題でほとんど私服みたいな格好をした生徒もいれば、髪の色も染め放題で、もしも窓ガラスが割れたり、壁に無数の落書きがあつたりしたならば、不良学校と勘違いしてしまった事だろう。屋上で昼食なんてのは^{ほんとん}α世界では漫画や小説の中だけの話で自殺防止、安全重視の考えからか殆どの学校の屋上には鍵が掛けられていて、普通は生徒達が立ち入る事はできない。できるとすれば教室のベランダくらいである。

β世界では障害や殺人などといった他者を傷つける事件が横行している反面、自殺や事故と言った事件はないと言えないもののあまり発生しない様だ。事故に遭いそうになっても魔法で回避する事が出来る者もいるのだから、当然と言えば当然だ。自殺者が少ない事に関しては精神医学の知識があるわけでもない俺にはわかるはずもないが、『将来に夢を持ってない若者が多いから自殺が横行している』と書いてあるような記事を読んだ記憶があつたので、そこか

ら推察するに現実世界自体が夢の様なこのβ世界では、自殺する必要はないと言ったところなのだろうか。

そんな事を考えながら屋上へと続く階段を鹿之助の見たくもない尻を追って上がって行く。

廊下がすべて木製の艶やかな床であるこの学院だが、階段はすべてコンクリートの上に薄くゴムを敷いた様な緑の床になっている。壁は全面、白で統一してあり清潔感はあるが階段だけはゴム床の色調のせいもあってか少し陰気な印象を受ける。

学院に中央にそり立つ時計塔を除いて、全館三階建ての学院は玄関から右側が下級魔錬師と中級魔錬師の教室棟。左側が上級魔錬師の教室棟となっていて、以前の洞窟事件の時や実習で利用する巨大な体育館は上級魔錬師の教室を横切って左棟の一番奥となっている。広大な学院内で正反対に位置する体育館は実習の度に億劫な気持ちを抱かせる。上級師の教室前を通るから尚更だ。

基本的に学院内での下級生と上級生の仲は決して良いとは言えない。

α世界ならば上級生は下級生の面倒を見、そんな上級生に下級生は少なからず尊敬と憧れを抱くものだが、β世界では学院の性質上そういうわけにもいかない。

と言うのも、まず年齢がばらばらだからだろう。上級師には年長者が多いのも確かだが、翔。正しくはβ世界の翔の様に飛び級で年齢に拘らず上位の級へあがる者もいれば、その逆もある。実力がなければ上がれない、厳しい世界なのだ。俺の様などても出来の良いとは言えない人間にしてはくそっ食らえなシステムなのである。

さらには軍隊の様に昇格もあれば、降格もある様で、下級師から中級師に上がった者がいれば中級師の中で成績の悪い者が下級師に降格される事もあるらしい。そんなこんなで上級生が下級生に優しくなんてのはお笑い種でライバルを蹴落とす感覚で下級生を見下している上級生と隙あらば席を奪い取ってやろうと目をギラつかせる

と下級生いった格差社会の縮図の様な構図が出来上がっているわけだ。

しかし、表向きは下級生は上級生に敬意を表すふりはしているし、下級生に襲い掛かる上級生なんてのもいない。位が下の者を襲うのは恥ずかしい事とされている風潮はあるみたいだ。

なのでそんな一触即発^{いっしょくそくはつ}、弱肉強食な学院内でも俺の様な子兎^{こう}の如き下級師でも、のほほんと暮らしていられるわけだ。

学院の屋上はべらぼうに広く、ベンチや花壇などが点在し、中央には華美な装飾を施された噴水まであり、まるで洒落な公園みたいな作りになっていて、弁当持参学生の人気昼食ポイントだ。

ベンチはカップルの指定席で、同性同士は金網越しに陣取るといふ何やら気に食わない住み分けがされている。俺と鹿之助も例に漏れず、空いている金網越しに腰掛けて弁当を広げた。鹿之助は購買で買ったパンをナイロン袋から取り出て広げ、俺の昼食はいつも翔が用意してくれている。

今日はパスタ弁当だった。翔の弁当のセンスは多少変わっている。と言うか唯一の欠点と言える。

普通は弁当に使用するパスタはナポリタンが俺の常識だ。例外があるとすれば、たらこスパゲッティくらいだろう。しかし、入っていたのは和風キノコスパゲッティだった。隣りには一口サイズのおにぎりが二つ添えられている。おにぎりの具もキノコだった。おにぎりの具がキノコと言うのもおかしい。もつと言え、炭水化物と炭水化物というのにも納得いかない。さらに言えば、和風キノコスパゲッティは妙に汁気が多く、その汁気がおにぎりに侵食し、湿らせているのも気に入らない。

けれど、祖母に弁当を作ってもらうと白米の真ん中に梅干し一つの日の丸弁当しか用意しないのだから、文句も言えない。

納得のいかないまま、パスタをおかずにおにぎりを頬張った。

「つてかさ、奔っちは千早さんとは仲良くやれてんの？」

「まあ……会話自体してねえし。仲が悪くなりようもねえわな。」

鹿之助が焼きそばパンを頬張りながら興味津々といった表情を浮かべる。

屋上のコンクリートにあぐらをかいて座る鹿之助の足の間にはメロンパン、ウインナーロールにシュークリーム、おかかおにぎり、うめおにぎり置いてある。

本当にそれを全部食うのか？ などと尋ねるのも面倒なのでスルースキルをいかになく発揮して返答する。

薄々感じていたが、世良羅はどうやら大半の生徒に恐れられているらしい。

確かに人畜無害じんちくむがいとは言い難いし、突然襲い掛かってこないとも断言しづらい性格をしているが、俺からすれば怖いと言う程でもない。

「まあ上手い事やれているんなら、俺は別にいいんだけどね。うちのシャルミーちゃんみたいにおしとやかで可憐なバディーを持つ身としては親友であるお前を心配してやらんわけにも……な。」

シャルミーと言うのは鹿之助のバディーの名前である。眞柄まがら・シヤルド・シャルミー。明らかに日本人ではない事はわかるが国籍までは知らない。

青い色のショートカットに青い瞳が特徴的な無口な少女。まだ声すら聞いたことはないが、幼さの残る面影はあるものの世間一般的に言えば美少女であるのは間違いない。

俺としては控えめすぎる胸部が気になるところだが、それを補って余りある可憐さを考えれば、ありかなしかで聞かれれば当然ありと言わざるおえない。

けれど、見た目だけで言えば色気のある分、世良羅に軍配があがる。俺は無性に腹立たしくなって、馬鹿面でメロンパンに噛かり付く鹿之助の背中を力一杯叩いて「親友になったつもりはない。」とお得意の悪態をつく。練成して攻撃しなかったただけ感謝してもらいた

いくらいだ。

「痛えなあ。折角心配してやってんのに……。まあ上手くやれてるなら、来週の結束集会も平気か。」

大量の食料を完食し、膨れた腹部を擦りながら鹿之助が口にし、俺は思わず眉根を上げる。

「なんだ？ その結束集会って？」

「バディー決めの後、静琉ちゃんが言ってたじゃねーか。バディー結成を祝して、クラス内のバディー対バディーで模擬戦をやるって。」

鹿之助に過失はない。バディー決めの後、俺は世良羅にのされて失神中だったから過失があるとすれば世良羅だ。けれど過失はないがシュークリームのホイップを口角に残したまま、安穩あんのんと語る横顔には殺意を覚えずにはいられない。

翔お手製の Pasta 弁当の空き容器を思わず無機質なコンクリートへと叩きつける。

今更ながらにβ世界のこういう所には呆れてしまう。α世界では喧嘩好きの不良か格闘技でもやっていない限り、戦闘する事など殆どない。授業の一環でそんな事を行えば、教師はあつという間に教育委員会に処分を下される事だろう。

「それって、欠席するとやっぱりまずいよな？」

「単位には関係ないかもしれないが、俺は欠席して静琉ちゃんにシバかれる方が怖いけどな。まあある意味、あの爆乳美女に一度はシバかれない気もするが、命は一つ……ってね。」

飄々《ひょうひょう》と話す鹿之助に「だよな。」と同意して、弁当を包み終えた俺は屋上の金網に寄り掛かった。

カシャンと小気味のいい音を立てて歪む網目越しにグラウンドを憂鬱な表情を浮かべて見下ろす。

正直、戦闘だ何だというのには多少は慣れたが、世良羅が俺と快

く連携をとってくれるとは思えない。下手をすれば無防備な背中を
撃ち抜かれるのではないだろうか。むしろそれが目的で俺とバディ
ーを組む事にしたのではないだろうか。とネガティブな思考だけが
頭を巡る。

グラウンドで魔法錬成の自主練習をしている中級師達を見下ろし、
悲観に暮れた。

「でも奔っちが知らなかったって事は千早さんも知らねえかもしれ
ないな。教えてあげた方がいいんじゃないか？」

確かに俺を保健室に運んだ世良羅が知らなくても不思議はない。
俺を含んでクラスの生徒達と会話する事のない彼女が俺以外の誰か
から教えてもらおう、という事も考えにくい。

「それって来週のいつなんだ？」

「えっと、週明けの月曜だよ。」

（今日が金曜日だから……。）

ゆとり教育などと言う康寧^{こうねい}な響きとは無縁と思えるβ世界だが、
土日休みは常識な様で週明けの月曜日と言えば、今日伝えなければ
世良羅はその事実を知らぬままに結束集会なるバトル大会に突入す
る事になるだろう。俺が知っていたのに伝えなかったと知れば、何
かしらの体罰を与えられる事も考えられる。いや、寧ろ確定事項だ
ろう。

保健室で会話してから今日まで会話をする事もなく、日々が過ぎ
ていたので、このままではいけないとは思ってはいたのだから、話
しかけるネタとしては振って沸いたチャンスなのだが、伝えた時の
反応が良いものである気がしない。

ジレンマに苦しみながら弁当を包みなおした俺は、予鈴に急かさ
れる様に教室へと向かった。

教室に戻ると白木の机が羅列された最後尾。窓際の指定席に静謐な佇まいで小説に視線を落とす世良羅が目に入った。

右耳に掛かった髪が重力に解かれて、さらさらと輪郭をなぞる。

物語のお姫様をくり貫いて窓際に飾った風な世良羅に近寄り、自分の席に掛かっている鞆へと弁当箱をしまう。

結束集会の事をいつ切り出すべきかと思案し、いざ声を掛けようとする手には震えが走るほどの緊張が身体を強張らせた。けれど、早いに越した事はないだろうと思い、ノミ並の心臓に鞭むちを入れる。

「あ、あのさ……。」

一瞬身体をぴくんと強張らせて反応を示したので聞こえてはいるのだろうがあくまで無視を決め込むつもりらしい。

「週明けの月曜日、結束集会があるって知っているか？ バディー対抗戦——」

すべてを話し終わる前に、小説を机に叩き付けてその反動に身体を飛び上がらせた世良羅に俺は驚き、身体を仰け反って距離を空けた。

世良羅の絹糸の様に細く白い指先がだらしなく首元で緩んだネクタイを引っ掴み、絞まった襟首が頸部を圧迫して脳へと送られる酸素を遮断する。

酸素を求めたいのは俺の方なのだが、目の前の金色の美女も水面から顔を出した鯉の様に口をぱくつかせて、大きな瞳をはためかせる。本当に酸素が欠乏しているのか、頬は紅潮し、その余波が耳までも及んでいる。

愛らしい口を大きく開き、息を吸い込んで瞳を睨り、何やら一頻ひとしきり力む素振りをした後に心地の良い美声を響かせた。

「ぜっ、絶対、か、勝つからね！」

予想外の返答と酸素不足に俺の思考回路は混乱の一路であった。

「と、取り敢えず……タイをひっぱ、らないでくれ……。」

懸命に引き絞った俺の悲痛な声に、至近距離まで近づけていた顔の表情筋に入っていた力を撓たわませると同時にネクタイを拘束する握力を弱めてくれた。

「驚いたな……。こんなに興味を示すとは思わなかった。」

無酸素の呪縛から解放された首元を擦りながら、すっかりしゃがれてしまった声を絞り出した。

締め殺されそうになった事にも驚いたが、最も意外だったのは世良羅の反応だ。俺の発する言葉には須すべらく不平の一つ、不満の一つも言いそうなツンはあってもデレはない彼女だからこそその意外性だ。（実は中身は別の人間なのでは？）と疑いたくなる衝動を、そんな訳ないだろうと、すぐに振り解く。

それにしあって様子は明らかにおかしい、恥ずかしそうに顔を赤らめ、毛先を指に巻きつけてはくるくると落ち着きがない。

「な、何だかよくわからんが。頑張ろうな。」

とりあえず考える事をやめる。俺は悩むくらいなら考えない主義だ。

だからこそ過ちも多いが、考えたってどうせ違えるのだから、それならば考えるだけ時間と糖分の無駄と言うものだ。

「足、引っ張らないでよね。」

「せいぜい気を付けます。」

会話がひと段落した所で、昼休憩が終了した事を告げるチャイムがなり、慌ただしく教室に駆け入って来る者で一時教室は騒然としたが、その後を追う様に入ってきた教師が猥雑わいざつを鎮め、退屈な授業を開始した。

俺は鼻と唇の間にペンを挟み【退屈ですよポーズ】をとり脳の回復に入った。特に頭を使った記憶もないが、俺の頭は通常生活の中

でも十分に疲弊する。容量が少ないのだから仕方がない。などと授業に集中しない事の言い訳を己にして、意識を遙か天空へ。

もちろん授業のノートは後で我が最愛の弟に写させてもらおう寸法だ。

「兄さん帰ろうか。」

机に突っ伏して惰眠^{だみん}を貪る俺を翔が揺すった。

最近分かった事だが、この学院は教師イコール生徒な形式からか、授業中に上の空だろうが、寝ていようがあまり注意される事はない。もちろん注意する教師もいるが、ほとんどの者は教科書の進行に従事して【教育】を行使する事はない。

けれど単位が取れねば永遠に卒業できないシステム上、大概の生徒は真面目に授業に取り組んでいる。俺が真面目に励む気になれない要因の一つとして今だ漂流者という立場に甘んじている事は否めないのかもしれない。尤も^{もっと}α世界でも真面目に授業を受けていた記憶もないけれど、それは今は置いておこう。

魔法練成技術の習得は今の俺には最優先事項なので真剣に取り組まなければならぬのだが、余計な知識まで身につける気はない。必要最小限。こと戦闘に関してはさらに優先度は下がる。けれど、昼食時に降りかかった唐突な戦闘イベントは不可避なもので、β世界での生活には戦闘技術が多分に必要な事もまた事実だろう。

帰り支度を整え、隣の世良羅をさり気なく横目に見る。

帰り支度もせずに、彼女はまた小説を広げていた。昼の反応はやや俺の心の中に疑問として残っている。本当は俺と仲良くしたいと思っっているのかもしれない。

止せばいいのに、脳がまだ半覚醒だったのだろう。俺は周囲から己を隔絶するかのように手元にある架空の物語へと遁走する彼女へと声をかけた。

「千早さん、帰らないの？」

声をかけた後に後悔する。すぐに反応を示さないという事は無視されるという事なのだろう。俺だって無視されれば傷つく。案外、繊細な少年なのだ。

「じゃ……じゃあ。」何やら気まずくなって慌てて席を離れようとすると、身体の前で小さく振った手を掴まれた。

「い、一緒に、帰る。」

これには昼休みの時よりも驚いた。何かのフラグが立ったのだろうか、明らかに今までの俺と世良羅の関係性ではあり得ないルートに進んだ。

しかし、断る理由もない。彼女は俺の相棒だ。それよりも断った後の自分の身が心配だ。

翔の顔をちらりと見やると了承の意を含んだ笑顔を俺へと傾けていた。

翔は兄である俺が言うのも何だが、かなりのブラコン性癖があり、兄を傷つける者には決して心を開く事はしない。けれど不思議な事に世良羅はその限りではないらしい。一度目の保健室に現れた時も二度目の時も寧ろ世良羅をフォローしている素振りすらも見とめられた。

こうして、ブラコンな弟とツンデレな相棒と共に家路につく事となった。

校門までの道中、他生徒の視線が痛い程に突き刺さる。色々な意味で目立つ二人を伴っているのだから当然の事だろう。翔には言うまでもなく女子生徒達のファンクラブ染みたものが存在するし、世良羅にも秘密裏にそれに順ずる組織があるのだと、男子達の間では実しやかに囁かれている。実害のない者達は本当にお気楽で羨まし

い。

一緒に帰ると言っても、校門前のバス亭前までで、俺達はほとんど乗る者のいない山頂行きだ。しかし、広大な学院は校門前のバス亭に辿り着くまでに十分以上の道程があるのだから一緒に帰ると言えなくもない。

「それじゃあ、ここで。」

丁度、到着時にやってきた山頂行きのバスに乗り込もうとする俺の袖を翔が引っ張り、耳打ちをする。

「兄さん、千早さんと一緒に街にでも行って来たら？ 僕達はいつまでこの世界にいないければならないかもわからないし、バディーとしてコミュニケーションをとっておいた方が得策だと思うよ？」

嫌がる俺を押し退け、そう言っただけでバスに乗り込んだ翔は運転手に「彼は乗りません。」と告げてバスを発車させ、取り残された俺と世良羅は飛び去って行くバスを呆然と見送る。気が利きすぎる出来た弟も考えものだとこの時ばかりは思わずにいられなかった。

しばしの静寂の後、沈黙に堪りかねた俺が「ま、街の案内をしてくれないか？ 俺、こっちに来たばかりで。」と言うと予想外に快く承諾された。

「なんで君なんかと！」とか、地図を渡されて「どうぞご勝手に。」ってパターンを予想していたが、世良羅も結束集会を前にして、俺とのコミュニケーションの必要性を感じていたのかもしれない。

俺達の通う学院は日本列島の中部北側の【北都地^{ほくとち}】と呼ばれる場所であり、その地域はα世界では栄えた場所とは言えない。どちらかと言えば【地方】【田舎】と呼ばれる地域だ。

しかし、そんな北都地もβ世界では軍事都市と呼ばれる場所のよう
うで、ある程度の発展が見られた。

それと言うのも、海を挟んで北にある大陸の【北^{ペイ}】と言う国と日本
はある種の冷戦状態と呼べる状態にあったからだ。

α世界と異なり、魔科学が発達したβ世界は裏を返せばα世界と
比べると戦闘技能に特化した人類と呼べる。そんなβ世界だからこ
そ、国家間での争いも起こる様で隣国である北との国家情勢も微妙
と言わざるを得ない。α世界では国家間の戦争など歴史や物語だけ
の産物であっただけに、そんな話を祖母に聞かされた時は思い切り
カルチャーショックを受けたものだ。

情勢が揺らいだ発端は三年前に起きた北国民による自爆テロ事件
だ。

北都地にて火炎系術式を暴走させたテロ犯により、都心は炎上。
死者は百名を超えた。

日本が北に攻撃される理由は十分にあった。世界的に有数の魔科
学技術発展国である日本は軍事力、経済力共に大国である北を上回
ろうとしていたからだ。北にとっては目の上のたんこぶの様な存在
であった事は存在に難くない。

一時は戦争に発展しかけたその事件だが北政府側の「一部の反政
府分子によるテロ行為」であるとの主張により、確証が得られなか
った日本は一度は振り上げた拳を下げる形となったのだった。

そんな政治的な事情もあり、北都地は北に対する防衛拠点と威嚇
の役割を担う重要な軍事拠点となり、有事の際の貴重な戦力である、
魔練師を多く輩出する魔立学院がこの北都地に建造されたわけだ。

不謹慎な言い回しになるが、さすがに三年前、都心に壊滅的打撃
を受けただけはあり、都心部は新築のビルが立ち並ぶ最新鋭都市と
いった風格があった。

綺麗に舗装された歩道に一定感覚で植えられた街路樹の控えめな

枝振りが灰色の街にささやかな彩りを与えている。

立ち並ぶビルはどれも新築でディテールにこだわった外装だった。球体に近いビルや、円錐形のビル。α世界では見る事のできな
い近未来的な印象を受ける街並みに自分が別世界にいる事を思い出
させられる。

粗方散策し終わり、歩きつかれた俺達は世良羅行きつけの喫茶店
へと足を踏み入れた。

ファンシーで色彩豊かな外装をしたその喫茶店は俺の世良羅への
イメージとは大幅な隔たりがあった。

彩り豊かな什器が配置されており、形状も曲線のみで構成されて
いる店内は女性客で占められていて、強烈な疎外感を感じさせる。
橙色のチェックのタイトなシャツとミニスカート、そしてたつぷ
りとレースの施されたエプロンをつけたウェイトレスにメニュー表
の中で一番最初に目に付いたホワイトチョコレートカフェモカなる
ものを適当に注文した。名前を見ただけでは殆どの商品が想像もつ
かない。

届けられたホワイトチョコレートカフェモカは大量の砂糖が溶け
込んでいるのか、喉をつくほどに甘かった。軽く咳払いを一つして
正面でブレンドコーヒを啜る世良羅に視線を向け、（俺も普通に
ブレンドにすればよかった。）と後悔した。

一日一緒に街中を練り歩いたというのに会話はほとんどなかった。
何かを質問しても、「そう。」とか「違う。」と言うだけで、一言
で返せないような質問をした場合は「知らない。」と返されるだけ
だった。

この喫茶店に入る経緯も何とも居心地の悪いものだった。俺が「
どこかでお茶でもしようか？」と場の雰囲気と和ませようと意を決
して言葉を発すると、突然前に躍り出た世良羅が何も言わずにここ
まで歩いて入り、俺はそれに黙って従い、そこには和やかなムード
が介在する余地など微塵もなかった。

「こ、ここにはよく来るのか？」

「わりと……。」

「なんってゆーか、俺はこういう所には来た事なかったけど、男にはちよつと入りづらいよな。」

「そう……。」

「他に目立ったスポットとかってないのか？」

「ないわ……。」

「買い物とかしたければ付き合うぞ？」

「買いたい物があれば、今度一人で来るわ……。」

「そ、そうか……。」

「ええ……。」

俺は激甘のホワイトチョコレートカフェモカを一気呵成に口内へと流し込んだ。

濃厚凝縮砂糖飲料に五四〇円も渋々支払った俺は、相棒との会話もろくにできぬまま、情けなく肩を落として、世良羅と近くのバス亭へと歩いた。

本来の目的は関係回復のはずだったのだが、悪化した気がしてならない。

バス亭について時刻表を見ると、山頂行きはまだ出たばかりで先に来るのは世良羅の乗る旧市街行きだった。旧市街とは自爆テロで被害を受けていない北都地外縁の市街を指すらしい。

バス亭のベンチに腰かけた俺は口直しに自動販売機で購入したブラックコーヒーの缶の口を切った。

世良羅は俺が座った所から人一人分離れた右隣へ腰かけ、鞆から小説を取り出して読み始めた。

旧市街行きへのバスは後十分程で来るのだが、待合に誰もいないバス停での二人の気まずい時間は時の流れを遅くする。

焰色ほむいろの夕日と漆黒の闇が混ざり合う、世界の入れ替わりの時刻。山々に囲まれたこの北都地のそれはあまりにも幻想的で、その場の空気に重くなる俺の心を数ミリグラムだけ軽くしてくれた。

「結束集会、何で勝ちたいんだ？」

夢現ゆめうつの景色に惑わされ、軽くなった口から聞かぬと決めた疑問が零れる。

右からの視線を感じて、缶コーヒーの飲み口へと落としていた視線を気配のする方へと向ける。

夕日に背を打たれた世良羅が同じく手元に落としていたはずの視線を俺の方へと向けていた。

金色の瞳が正面からの常闇とこやみに陰っている。世界の中心に存在しているような圧倒的に魅惑的な存在感を放つ世良羅に手に持つ缶への

圧が緩む。白色の肌に浮かぶ憂いの色は陰る世界とはまた別の陰りを孕^{はら}んでいる様なそんな気がした。

「――勝たなければ、ならない。私は負けるわけにはいかないから。」

小さな声量にそぐわぬ強い意志を感じる語勢。

気圧されてしまう圧迫感がありながら、どこか心地がいい声色。

戦闘とは言えたあの学校行事。俺としては無事に終わる事ができればそれでいい。それでよかった。

しかし、そんな風に考えていた事がとても恥ずかしく思えた。少なくとも俺の相棒はそんな風には思っていない。勝たなければならない理由。負けてはいけない理由。それを今は聞いてはならないような気がして、再び沈黙の呪縛が俺の口を固く閉ざした。

すぐに旧市街行きのバスが到着して乗り込んでいく世良羅は俺の方を振り返る事はしなかった。

ただ、前をすれ違う時に微弱な呼気を吐く様に「バイバイ。」と言葉を残して行った。

闇が侵食する方へと滑走する浮遊バスを見送りながら、沈み落ちかかっていた空の缶に力を込める。

背もたれにずるずると寄りかかり嘆息を吐き出して情けない声で呟いた。

「シリアス担当は弟の役目なんだけどな……。あんな顔しやがって、勝たなきゃならなくなっちゃったじゃねえか。――なあ相棒。」

「お客さん、乗るの？ 乗らないの？」

いつの間にか到着していた山頂行きのバスの運転手が感慨に耽^{ふけ}る俺の氣勢を根こそぎそいだ。

家に戻った俺を迎えるのは卑しい顔をした祖母と弟かと思えば、事態は予想の斜め上を行った。

「兄さん、お婆ちゃんが兄さんの術式を少しだけ解析できたみたいだよ！」

喜々として俺を出迎える翔の言葉に俺も驚いた。β世界に来てからほとんど進行のなかった俺の腕にいつの間に装着されていた謎のMRDの解析が進んだと言うのだ。

解析自体面倒でやっていないのではないか？　と思っていただけに喜びもひとしおだ。

「――で、何がわかったんだ？」

既に冷めてしまっているお決まりの献立の夕食を食べながら聞くと、祖母が自慢げに老眼鏡を外して語り始めた。

「そのMRDにインストールされている術式は驚くべき事に思念化の必要性がないのじゃ。簡単に言えば、イメージキャンセラーと呼べるものがそのMRDには内包されており、それが思念化をオートで行ってくれるという仕組みじゃな。機械練成が可能なのも頷けるわい。」

「なんでそんな技術が？」

「さあな、それはわからん。複製や解析をしようにも、イメージキャンセラーの構成情報を調べようとすると特殊なプロテクトがかかっておって解析できん。無理矢理探ろうとすれば、構成データそのものを壊しかねん。」

「それじゃあ、結局は何も分かってないって事じゃねーか。」

俺は食べ終わった皿の上に箸^{はし}を投げ入れた。文字通り匙^{さじ}を投げるというやつだ。無論、正確には箸^{はし}なのだが。

「いいや。分かった事はある。まず第一にそのMRD及びシステムは明らかにオーパーツと呼べる物じゃ。」

オーパーツとはその時代の技術にそぐわない物を指す言葉らしいが、 α 世界の住人である俺からすれば、 β 世界のすべてがそうであるのだからまいちその凄さがわからない。それはすでに感覚が麻痺しているせいなのだろうか。

「そして、第二にそのMRDは貴様との生体リンクによってしか起動せん。貴様が装着しておれば、外部からの操作も受け付けるが、貴様から外せばうんともすんとも言わんだだの鉄屑になると言うわけじゃ。」

「なんで、俺と……。」

「それもわからん。最後に分かった事は分からん事が増えたとも言えるのじゃが、そのMRDのデータ要領の殆どを隠しファイルの不可侵領域が占めておると言う事じゃ。」

「そりゃどういう……?」

「ここまで聞いてわからんとは脳みそ入っておるのか? その領域さえ解析できれば元の世界に帰れる可能性が大きいと言う事じゃ。」

まあ解析方法すら検討もついちゃおらんが、な。」

一頻り話し終わったのか、祖母が湯のみを傾け、喉を鳴らして茶を啜った。

確かに分からない事ばかりで、それが枝葉の様に増えていく感はないが、それでも希望の光が確かに灯った気がした。

俺ならば、このMRDを操る事が可能な事。隠しファイルさえ解析できれば、手がかりが見つかる可能性が高い事は一筋の光明すら見えない状態よりも幾分もマシになったと言える。何をすればいいか分かったわけでも、いつ α 世界に戻る事ができるのかも分からないが可能性を提示されたのだから心高ぶらないわけではない。

「――ああ、言い忘れておったが、隠しファイルのロック解除の鍵は術式発動かもしれん。」

上機嫌で食器を洗う俺の手が止まる。

「今日デートしたとかって言う金髪姉ちゃんと一週間前に戦った時

に左腕を練成させたと言っておったじやろ。その後には不思議と解析が進んだ。さらに言えば、その前に学院で初めての魔法練成をした後もそうじゃ。そこから考えるに鍵は術式発動なのじゃろうな。」

「それなら――」と右腕のMRDを撫でる俺の左手を翔が突然掴んだ。

試しに他の術式を発動してみようと思った俺の心を見透かしたのだろう。それにしても何故止める必要があるのか俺は怪訝そうに真剣な面持ちの翔を見やった。

「べ、別にここで発動しようってわけじゃねーよ。ちゃんと外で――」

「そうじゃないんだ。兄さんは魔力暴走って言葉を知っているかい？」

怒った顔つきだった翔の表情が悲壮な顔つきへと変わる。

離された左腕の行き場を失った俺は、その手を浮かしたままの姿勢で停止し、首を軽く左右に振った。

「術式練成をする際のエネルギーである魔力が人間には備わっているって事はわかってるね？ 魔力は有限であり、総魔力量の低い者が必要魔力量の高い術式を発動させようとした時に起こる事象を魔力暴走と呼ぶ。前にお婆ちゃんが話してくれた都心部での自爆テロは魔力暴走を利用したものなんだよ。」

そこまで聞けば、いくら察しの悪い俺にでも分かった。

つまりテロ犯は自分の総魔力量を上回る必要魔力量の術式を使用し、それによって暴走した魔力が市街を爆破、炎上させたとそういう事なのだろう。

「何でそんな事が？」

「今だ詳細な事は分かってはいないみたいだけど……自爆させて実験ってわけにもいかないだろうからね。兄さんの今の魔力量では今ある五つの術式すべてを発動させる事はできないって事さ。」

「そんな事やってみなけりゃ……」

抗弁する俺の右腕を翔が掴んで持ち上げ、憑代を起動させた。

翔が何やら操作すると紫色のパネル上には【腕】の詳細情報が表示された。

「この術式の最低必要魔力量は五〇〇メガバイト、それに対して兄さんの総魔力量は一二〇〇メガバイト。こないだの両腕の術式発動がぎりぎりだったって事だよ。ちなみに【脚】に必要な最低魔力量は八〇〇メガバイト。次に低い【盾】だとグンと上がって一ギガバイトも必要なんだ。」

「な、なんで俺の総魔力量が分かるんだよ？」

そこからは祖母と翔が幼子^{なだ}を宥める様に説明してくれた。

生体情報から大よその魔力量を測定する事が出来るらしい。

総魔力量は訓練によってその上限を引き上げる事ができるらしく、その為に魔立の学院では上昇速度と幅が大きいとされる戦闘行動を授業に盛り込んでいるのだと言う。総魔力量も必要魔力量も体調や状況によって多少の変動はあるものの、魔力暴走の危険が伴う以上魔練師は測定された以上の無理な魔法練成は極力行わない。

結局俺は少年漫画の主人公みたいに修行を積んで、総魔力量の上限を引き上げる道しかない^なと知った。

あまりの歯痒さに唯一の頼りである腕のMRDに憎悪に似た感情が沸いた。

先程までは自分にはこのMRDが扱えると聞かされて有頂天になっていただけに、扱える範囲があると聞かされた途端にいじらしくなるのは人間の性なのだろうか。

（俺ではなく、翔ならばもしかしたら）と情けない一念が沸くが頭を振って、思考の外に追い出す。

眉間に皺を寄せている俺の顔を見上げて、顔色を七面相の様に慌てふためかせる翔に気づき、力んだ体の力を解いて、栗色の頭に手を乗せて出来る限り気丈に振舞った。

「俺にまかせとけ。」

俺が特訓をして早く総魔力量の上限を引き伸ばす事ができれば、

それだけ早くMRDの解析が進む。考えようによつては道筋がはっきりしたとも言える。

肩を落としている暇なんてない。ただ我武者羅に前へ行けばいい。頭の悪い俺には単純で丁度いいのかもしれない。

翌日の土曜日、休日だと言うのに珍しく早起した俺は庭にでて、魔法練成の特訓をしていた。

何度も何度も練成を繰り返す内に魔力が磨り減っていく感触が段々と分かるようになってきた。

ゲームのMPとは違い、総魔力量は術式を発動させればその必要魔力量分だけ減るというものではなく、術式を発動させる時にそれくらいの魔力があればいい、というものだ。

必要魔力量の何割消費しているのかはわからないが、確実に体内の魔力量は減少していく。魔力の残量が少なくなっていくと倦怠感^{けんたいかん}を覚え、身体に力が入りづらくなってくる。身体が極度に疲労している感覚と風邪を引いて体がけだるい時の感覚を掛け合わせた様な感じだ。

おおよその感覚で魔力が減少してきているのがわかるものの、それが必要魔力量を満たすだけの残量があるのかを正確に把握できないのは問題だ。

魔力暴走の話聞いてしまったからには発動するたびに恐怖が纏わり着く。

魔力暴走にも色々な段階があり、暴走すれば発動者が爆発したりと言う事は稀な様で、微量の消費魔力の超過では術式発動が不完全だったり、発動そのものがされなかったりするくらいで危険な事はないらしいが、やはり怖いものは怖い。

さらに思念化をオートですと言うイメージキャンセラーなる代物がまた厄介で、無心で発動して身を任せれば、ATモードで発動した時の様に歪な形状に練成されてしまう。ある程度は自分の思考で思念化を補佐しなければならぬ。その感覚がイメージキャンセラーの存在を知ってしまうと中々に難しい。

十数回の練成の後、手足に痺れを感じ、立っているのもやっという所で術式は発動しなくなった。

この感覚を刻みつけなければならない。俺は体中に蔓延^{はよび}る恐ろしいまでの倦怠感に身体を委ねた。

013 (後書き)

これにて第一章完結です。第二章「結束集会編」もお楽しみにお待ち下さい。プロットと若干の書き溜めが出来次第順次アップしていきます。数少ない愛読者の方々に愛を込めて(笑) ※第二章アップ後、この後書きは削除させて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941y/>

ゴーレムマイスター

2011年12月16日18時55分発行